

『日本アジア研究』第13号（2016年3月）

## 抱甕老人と三言二拍の原刻本について

大塚秀高\*

『今古奇観』の訂定者を名乗る抱甕老人は凌濛初、手定者を名乗る墨愍齋は馮夢龍とみられる。二人は自らが編集した三言二拍の出来栄えに満足していなかった。そこで二人であわせて四十篇を選び、修正を加え決定版として刊行することにした。それが『今古奇観』である。現存する三言二拍の版本はいずれも原刻本ではない。原刻本の様相はそれに依拠して修正を加えた『今古奇観』の現存最古の刊本である宝翰楼本から窺い知ることができる。

キーワード：抱甕老人，墨愍齋，馮夢龍，凌濛初，今古奇観，宝翰楼本，三言二拍，原刻本

### まえがき

本論は、『今古奇観』のパリ国家図書館所蔵の呉郡宝翰楼刊本の本文の検討を通じ、それが依拠したと思われる三言二拍の版本の様相を、現存しない版本をも視野にいれつつ論ずることを当面の目的とし、その作業を通じ、部分的にはあっても、三言二拍の原刻本の本文の様相を明らかにし、あわせて『今古奇観』の訂定者とされる抱甕老人の実体に迫ることを最終目的として執筆されている。以下ではまず筆者が本論を著すにあたっての基本的な姿勢を明らかにしておきたい。

『今古奇観』は、抱甕老人が三言二拍から四十篇を訂定して刊行した選本である。三言は、馮夢龍の『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』を、二拍は、凌濛初の『拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』をさす。『古今小説』のみ叙に干支の記載を欠くため正確な刊年が明らかでないが、天啓元年前後と推定されており、それでおそらく問題はなからう。『警世通言』以降の刊年については、それぞれの叙により、順に天啓四年、七年、崇禎元年、五年とされる。現存の『二刻拍案驚奇』は戯曲一篇一卷をまじえるうえ『拍案驚奇』と一篇を重複させているから、三言二拍到収められる白話短篇小説（例外的に中篇というべきものもある）は百九十八篇ということになる。『二刻拍案驚奇』の原刻本が四十篇の白話短篇小説からなっていた可能性は少なからず存するが、その点については後述のこととする。

『古今小説』同様、『今古奇観』の叙にも干支の記載がなく、その刊行時期については、叙の内容や「皇明」の文字の改行拾頭により、『二刻拍案驚奇』刊行の崇禎五年以降の明代とされており、明代に南明時期が含まれるなら、筆者もそれに異存はない（以下でいう明刊本の明には南明時期が含まれている）。以上に簡述した両者の関係を念頭に、筆者は、現存する最古の『今古奇観』であり、明刊本とみてよいパリ国家図書館所蔵の呉郡宝翰楼刊本<sup>1</sup>（以下では宝

\*おおつか・ひでたか，埼玉大学名誉教授，中国俗文学

<sup>1</sup> 呉郡宝翰楼刊本については、拙論「『今古奇観』から見た三言二拍」（『和漢語文研究』第13号所収，2015年11月）に詳述した。就いて参照されたい。

翰楼本とよぶ)と、それが依拠した可能性がある、初期の三言二拍の版本の本文を比較し、抱甕老人が依拠した版本が具体的に比定できる場合は比定し、それが出来ない場合には宝翰楼本の本文をその依拠した版本の本文の後継とみなし、そのうえで、場合によってはそれを三言二拍の原刻本(またはそれに近い版本)の本文に措定することにした。

宝翰楼本に依拠した三言二拍の版本が存在したのは当然であるが、宝翰楼本がそれを忠実に再現したとは限らない。魯魚の誤りが生ずるのは避けられまいし、意図的な改変もなされたであろう。にもかかわらず宝翰楼本の本文をその依拠した版本の本文の後継とみなし、そのうえで、場合によってはそれを三言二拍の原刻本(またはそれに近い版本)の本文に措定しようとするのはなぜか。現存する初期の三言二拍の版本の本文にはあまた問題点があるからである。以下にそれを記そう。

三言二拍には『二刻拍案驚奇』を除き複数の初期の版本が現存しているが、本論で論ずるごとく、そのなかに初印本はもちろん、後修本を含め原刻本と確言できる版本はひとつも存在しておらず、本文にしても原刻本から少なからず改められているとみるに十分な証拠がある。現存の、その多くは明刊とされる初期の三言二拍の版本には、相互に、簡筆字の使用範囲や頻度、白話語彙表記の時代の推移を反映した文字遣いの相違がみられるほか、その多くに、後修本や重刻本に通有な、文字の「つめこみ」、墨格、挖改、眉評の一部削除、さらには眉評削除のおりに生じた版木の欠損、刷りを重ねた後印本に通有な曖昧模糊とした版面(邇邇葉)や版木の断裂の痕跡などがみえる。これらが多数みられる版本の本文をアプリアリに原刻本のそれと認めることはできない。

加えて、宝翰楼本には現存の三言二拍の版本と同等ないしそれ以上の眉批が附されていた。のみならず挿絵も三言二拍の挿絵より本文に相応しいものがあつた。眉批にせよ挿絵にせよ、三言二拍の初期の刊本と宝翰楼本『今古奇観』のそれとの間には継承関係が存在している<sup>2</sup>。一般に継承関係にある版本の眉批は後のものほど数を減らし、挿絵は数を減らすのみならず芸術性を遜減させる。刷りを重ね判読が困難になった本文や挿絵にもとづき版下を作成することになるからである。ところが、初期の三言二拍の版本と宝翰楼本『今古奇観』間の関係は必ずしもそうなっていない。この点を合理的に解釈するには、宝翰楼本の本文(眉批や挿絵を含む)に、現存していない原刻本(またはそれに近い版本)の初印本または早印本に依拠したのもあつたとみるしかないのではないかと筆者は考えている。ちなみに本論でいう三言二拍の初期の版本とは、本文毎半葉十行毎行二十字からなる版本をさしている。宝翰楼本は、眉批と挿絵を備え本文十行二十字からなる『今古奇観』の、唯一ではないがおそらく最古の版本にまず間違いない(断定を避けたのは『今古奇観』のすべての版本を調査したわけではないから)。

では上記の目的を達するために筆者はどのような手順を踏もうとしているのか。まず、『今古奇観』所収の四十篇の白話短篇小说を三言二拍ごとに括り、それぞれのグループ内における本文の相違を踏まえ、平心かつ総合的に宝翰楼本の依拠した三言二拍の版本を現存の版本のいずれかに比定することが可能かを検討する。次に、それが現存する初期の三言二拍の版本のいずれにも比定

<sup>2</sup> 以上の諸点については註1の拙論を参照されたい。

しがたく、そのいずれにも先行するとみなせる場合には、進んでそれを原刻本（正しくは原刻本を含む現存するいずれの版本より早期の版本というべきだが、以下では繁を厭い単に原刻本とよぶ）に措定しようというのである。

したがって、以下においては、三言二拍のそれぞれにつき、宝翰楼本『今古奇観』との比較の対象とした初期の版本の概要を略述し、そのうえで『今古奇観』に収められた作品における論すべき文本の相違を取り上げ、そのよって来るゆえんを考察し、最後に概括的な結論を述べることにしたい。当然、比較検討は文本のみならず眉批や挿絵にも及ぶべきであるが、挿絵についてはすでに論じており<sup>3</sup>本論では論じない。眉批は文本と密接に関わっており、両々相まって論ずるのがスジであるが、それに要する作業量との関係で今回は見送ることにし、かわりに以下で走馬観花の見通しを披露し、とりあえず責の一端を塞ぐことにした。

宝翰楼本の眉批と初期の三言二拍の版本の眉批とを比較すると、すぐにふたつの点に気がつく。ひとつめは眉批には作品ごとに多寡がある点である。これはおそらく依拠した三言二拍の版本における眉批の多寡を継承したものであって、それが手定した墨愍齋や訂定した抱甕老人が新たに附したものばかりではないことを示している。ふたつめは両者の眉批には共通するものも多く、なおかつ宝翰楼本の眉批には三言二拍の眉批にないものがあるという点である。これは両者に継承関係があり、宝翰楼本の眉批が現存する初期の三言二拍では失われた眉批を留めているか、新たに加えられた眉批を含んでいるかのいずれかであることを示している。

ひるがえって、ここでまとめて宝翰楼本『今古奇観』の本文の版面とその欠損の状況の概略を述べておきたい。宝翰楼本は挿絵に比し本文の版面の状況がよくない。挿絵と本文の版面の素材に相違がないのなら、挿絵は新刻された版本によって刷られた可能性が高いことになろう。封面に「諭世名(マ)言二刻」とある点に鑑みるなら、その刊行が24巻本『諭世明言(重刻増補古今小説)』以降である可能性を念頭に置いておく必要もあろう。『諭世明言』は衍慶堂の刊行で、衍慶堂からはほかに40巻本の『醒世恒言』と『二刻増補警世通言』ならびに24巻の『警世通言』が刊行されている。宝翰楼本の序は辺欄の一部を欠くが、本文ほど傷んでいるようにはみえない。

本文は、インターネット上の画像による限り、巻18「劉元普」の第33葉、巻28「喬太守」の第13葉裏～第18葉、巻38「趙鼎君」の第1葉～第7葉を欠く。また巻26「蔡小姐」の第7葉、第10葉表第3行～第6行を補鈔する。さらに巻39「誇妙術」は第11葉裏から第15葉裏の第4行までを欠くうえ、第11葉の版心の葉数表示を十六に誤っている。上記のほかにも文字の見えないところが複数存在するが、事実そうであるのか、画像作成時の不手際によるものかは明らかでない。既述のごとく版面の状況は全般に良好といえず、遺漏葉や版木に欠損や断裂があることを示す葉も多々あるが、それらについては詳しくは述べない。なんにせよ宝翰楼本が相当使い込まれた版本で刷られた後印本であることは明らかである。

## 一 『古今小説』に出自をもつ八篇

<sup>3</sup> 註1拙論。

『今古奇観』には『古今小説』に出自をもつ作品が以下の八篇収められている。

- 卷 3 藤大尹鬼断家私（『古今小説』卷 10，  
以下卷 10「藤大尹」のごとく略記する）
- 卷 4 裴晋公義還原配（卷 9「裴晋公」）
- 卷 11 呉保安棄家贖友（卷 8「呉保安」）
- 卷 12 羊角哀捨命全交（卷 7「羊角哀」＊）
- 卷 13 沈小霞相会出師表（卷 40「沈小霞」＊）
- 卷 23 蔣興哥重会珍珠衫（卷 1「蔣興哥」）
- 卷 24 陳御史巧勘金釵鈿（卷 2「陳御史」）
- 卷 32 金玉奴棒打薄情郎（卷 27「金玉奴」＊）

現存する『古今小説』（と 24 卷本『喻世明言』）の版本は大きくふたつの系統に分かれる。尊経閣文庫蔵本（以下では尊経閣本とよぶ。以下同様）と、これ以外の、法政大学蔵本（法政本）以下がそれである（以下では法政本系統とよぶ）。なかでは尊経閣本が原刻本の様相をより多く留めている。とはいえ刊行自体は法政本系統の早期の刊本に遅れるし、初印本でもなさそうである。法政本系統には法政本（欠巻 24～巻 29）、内閣文庫本（内閣本）に加え、24 卷本『喻世明言』（上記一覧の＊はこれを欠く）が含まれる。この三者の関係につき、筆者はかつて法政本と 24 卷本『喻世明言』が同版、内閣本はこれとは異版とみたく、法政本には刊行書肆が兼善堂である可能性が存することを指摘した<sup>4</sup>。刊行は、法政本、内閣本、24 卷本『喻世明言』の順であろう。

宝翰楼本『今古奇観』と『古今小説』の文本の比較では次のことが言える。

宝翰楼本の文本は尊経閣本のそれに近い。「呉保安」の第 2 葉表第 10 行（以下ではこれを 2a10 のように表記する）から始まる呉保安の手紙は、宝翰楼本では一字下げて「不肖保安」で始まるが、『古今小説』でこれと同一なのは尊経閣本のみで、他は一字下げず「呉保安不肖」で始まり、次行から一字下げている。むろんここは尊経閣本（と宝翰楼本）が正しい。

また「沈小霞」の宝翰楼本 40a7 に「又到北京」とあるが、尊経閣本のみこれと同一で、他は「又到此京」とする。依拠した版本が後印本であって判読が困難になっていたか、すでに誤刻していたかによる「重刻」<sup>5</sup>の際の誤刻であろう。尊経閣本のみが宝翰楼本に一致し、法政本及び内閣本は一致しない（両者は一致する）例は「蔣興哥」の冒頭の韻語、「陳御史」の 20a5 の本文にもみられる。これらは宝翰楼本と尊経閣本の親近性を示唆する。

さらに、「羊角哀」の 1a3 の韻語は宝翰楼本では「翻手」であるが、尊経閣本では「番手」、法政本及び内閣本は「背手」のような文字になっている。韻語の内容を勘案するなら「翻手」が正しいから、「翻」を同音で画数の少ない「番」で刻したものを「背」に誤刻した可能性がある。この想定通りなら、宝翰楼本所収の上記八篇の文本には原刻本の文本に依拠している可能性が考えられるかもしれない。

<sup>4</sup> 拙論「『古今小説』の版本について 資料：『古今小説』眉批対応一覧表」（『中国古典小説研究』第 9 号所収，2004 年 5 月）を参照されたい。

<sup>5</sup> 本論でいう「重刻」の意味については拙論「白話長篇小説版本研究の行方」（『中国古典小説研究』第 16 号所収，2016 年 3 月）を参照されたい。

だがそうした例ばかりではない。尊経閣本を含め、『古今小説』の上記の四種（24 巻本『諭世明言』を含む。以下ではこれを単に『諭世明言』とよぶ）の版本には、毎行二十十字の字数を越えて刻字している例があわせて四箇所みられる（以下ではこれを「つめこみ」とよぶ）。『古今小説』の「つめこみ」は当該行の文字を全体的に詰めておこなわれたわけではなく、本来一字分のスペースに二字を詰め込んでなされている。これは、あたかも依拠した先行版本の文字を最小の労力で修正した（先行版本の版木一字分を挖改したか、先行版本の印本の当該部分に紙を貼り修正したものを版下にした）かにみえる。これに対する宝翰楼本には「つめこみ」はみえない（次行以下に一字ずつ繰越している）。既述のごとく、『古今小説』も宝翰楼本『今古奇観』もすべて毎半葉十行毎行二十十字の刊本であるから、現存の『古今小説』が依拠して「つめこみ」をした先行版本が宝翰楼本のような版本である可能性は高くあるまい（版下作成時の脱字はすぐにわかるはずだから）。

一方、本字と簡筆字、同音の別字、誤刻、漏刻、衍字などは、全部ではないものの『古今小説』の方に目立つ。たとえば、「藤大尹」の末尾は宝翰楼本の「無不以為天報云」であるべきだが、『古今小説』では「不」がなく、「無以為天報云」となっているし、「金玉奴」の宝翰楼本は正しく「買臣妻之後夫」、「新太守旧夫人也」とするが、『古今小説』は「買臣の後夫」、「新太守夫人也」とする。これらについては、宝翰楼本が尊経閣本を修正したと考えることも、宝翰楼本が原刻本を含むこれと別の『古今小説』によったと考えることもできる。

なお、『古今小説』に出自をもつ上記八篇の、宝翰楼本と『古今小説』の文本における相違は、二拍はもちろん、他の二言に比し格段に少ない。なかでは「沈小霞」にそれが目立つが、さして意味のあるものはない。意味のある、おそらく意図的な相違としては、宝翰楼本の「裴晋公」11b2 が『古今小説』の「私行要子」を「私行體訪民情」とする例、「羊角哀」で、瀕死の左伯桃の様子を描く「角哀再將衣服擁護，伯桃已是寒入湊理，手直足挺，氣息奄奄，漸漸欲絶」という一文が宝翰楼本 5a7 のみに見える例、同じく宝翰楼本「金玉奴」のみに見える、薄情郎莫稽が死に際に見た夢を語る一段、「莫稽年至五十餘，先玉奴而卒。其將死數日前，夢神人對他說：『汝壽本不止此。為汝昔日無故殺妻滅倫，賊義上于神怒，減壽一紀，減祿三秩。汝妻之不死再合，亦是神明曲佑。一救無辜，一薄爾罪也。』莫稽夢覺，嗟嘆對家人說：『夢中神語，料道病已不起。』正是 舉心動念天知道 果報昭彰豈有私」の例があげられる<sup>6</sup>。最後の例は、莫稽によって船から水中に突き落とされた金玉奴の様子を描く一文、「初垂水時，魂費魄蕩，已拚著必死。忽覺水中有物，托起兩足，隨波而行，近於江岸。玉奴掙扎上岸」と呼応するかにみえるから、もともと存在していたとみて差し支えはなさそうだし、それあるがゆえにこの作品がまとまりを欠くことになってもいいようである。

<sup>6</sup> ちなみに、「金玉奴」は法政本では佚失しており、『諭世明言』には収められておらず、現存の『古今小説』のすべての版本でこの部分がなかったとは確言できない。なお「羊角哀」と「金玉奴」における『古今小説』と『今古奇観』の文本の相違については、程国賦『三言二拍伝播研究』（中国社会科学出版社、2006年12月）がすでに指摘している。

最後に避諱について述べておこう。宝翰楼本の「沈小霞」は二箇所、『古今小説』が「由此」「由是」とする箇所を「繇此」「繇是」としており、天啓帝の諱を避けているとみなせる。『古今小説』の「沈小霞」が天啓以前ないしは順治以後に刻されとまで断ずることはできまいが、宝翰楼本が天啓以降の明代に刻されたものであることは間違いなさそうである。避諱については三言二拍のそれぞれにつき後述することにした。

## 二 『警世通言』に出自をもつ十篇

『今古奇観』には『警世通言』に出自をもつ作品が以下の十篇収められている。

- 卷 5 杜十娘怒沉百宝箱（『警世通言』卷 32，  
以下卷 32「杜十娘」のごとく略記する＊）
- 卷 6 李謫仙醉草嚇蛮書（卷 9「李謫仙」＋）
- 卷 14 宋金郎団円破種笠（卷 22「宋金郎」）
- 卷 19 兪伯牙捧琴謝知音（卷 1「兪伯牙」）
- 卷 20 莊子休鼓盆成大道（卷 2「莊子休」）
- 卷 21 老門生三世報恩（卷 18「老門生」）
- 卷 22 鈍秀才一朝交泰（卷 17「鈍秀才」）
- 卷 31 呂大郎還金完骨肉（卷 5「呂大郎」）
- 卷 33 唐解元玩世出奇（卷 26「唐解元」）
- 卷 35 王嬌鸞百年長恨（卷 34「王嬌鸞」）

現存する『警世通言』の版本も『古今小説』のそれと同様ふたつの系統に分かれる。第 40 巻に「葉法師符石鎮妖」を収める佐伯文庫本（佐伯本）の系統と、「旌陽宮鉄樹鎮妖」を収める兼善堂本の系統がそれである。佐伯本の系統は、佐伯市教育委員会に蔵される佐伯本と三桂堂王振華本とからなり、兼善堂本の系統は、名古屋市蓬左文庫蔵本（蓬左本）に代表される兼善堂本と、衍慶堂が刊行した 40 巻本『二刻増補警世通言』（上記一覧の＋はこれを補鈔する）ならびに 24 巻本『警世通言』（上記一覧の＊はこれを欠く）とからなっている。ちなみにかつて筆者は、佐伯本の本文の版本は原刻本のそれを継承したもののだが一部補刻葉と後修葉をまじえ、三桂堂はそれを受け継ぎつつ校訂を施し簡筆字で新刻したもの、兼善堂本の本文は原刻本の後印本の重刻本ではないかと論じた<sup>7</sup>。

佐伯本と、蓬左本の同版早印本とみられる東京大学東洋文化研究所倉石文庫蔵本（倉石本）、補刻葉、後修葉をもち、この両者と同版本ながら蓬左本以降に刊行されたとみなせる早稲田大学蔵本（早稲田本）はいずれも封面を失っており、刊行書肆を明らかにしえない。『二刻増補警世通言』はかつて西本願寺の写字台文庫に蔵されており、その後満鉄大連図書館に移管されたが、現在は

<sup>7</sup> 『警世通言』の版本については、拙論「『警世通言』版本新考」（埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第 9 号所収、2012 年 3 月）を参照されたい。なお「『警世通言』版本新考」には別表 2 として「『警世通言』本文文字異同対照表(初稿)」，別表 3 として「『警世通言』眉批文字異同対照表」を収めている。あわせて参照されたい（ただし別表 3 には改訂版がある）。

所在を失っている<sup>8</sup>。天理図書館節山文庫に蔵される24巻本の『警世通言』はその節本であろう。確言はできないが、二刻増補本も24巻本も早稲田本の版木を後修して刷られたものであろう。しかく兼善堂本系統の諸本は基本的に同一の版木によって刷られているとみられる。三桂堂本は既述のごとく佐伯本と異版で、収録篇数を38、36と逡減させつつ長期に亘って刊行されたと思しく、多くの機関に所蔵される。だが完本の台北故宮博物院蔵本も初印本ではないようである。

ひるがえって未発見の『警世通言』の原刻本であるが、その第40巻には「旌陽宮鉄樹鎮妖」が収められていたはずである。佐伯本は、原刻本の版木からこの「旌陽宮鉄樹鎮妖」の版木を取り除け『三教偶拈』（刊年不詳、崇禎ないし南明時期の刊行であろう）に転用し、かわりに「葉法師符石鎮妖」を加え刊行されたものであるから、刊行自体はかなり遅れよう<sup>9</sup>。文本の相違は、当然ながら兼善堂本系の諸本間では少なく、これと佐伯本の間では大きい。

上記十篇の文本を宝翰楼本と『警世通言』に就いて比較すると、あまり変わらない篇と大きく変わっている篇にわかれる。このうち前者の文本については佐伯本に一致するか類似する。宝翰楼本「唐解元」の篇名「唐解元玩世出奇」は兼善堂本系統では「唐解元一笑姻縁」であったが、佐伯本では「唐解元出奇玩世」となっている。宝翰楼本「宋金郎」の題名「宋金郎團圓破瓊筵」がすべての『警世通言』で「宋小官團圓破瓊筵」となっている例もあるが、「宋金郎」が前述の相違の大きい篇のひとつ（後述）であることに鑑みれば、宝翰楼本と佐伯本の親近性を考える障害にはなるまい。

『古今小説』に存在していた「つめこみ」は、上記十篇に対応する『警世通言』諸本のすべてにあわせて五箇所みえるが、『古今小説』のように一字分の空間に二字を詰め込む手法ではなく、連続する複数の文字の間隔を詰めて一字増やす手法をとっている（もちろん宝翰楼本に「つめこみ」はない）。『古今小説』を刊行した書肆と『警世通言』を刊行した書肆とが異なっていたことに由来する相違であろうか。注目すべきは、この「つめこみ」のうち四箇所が文本の相違が大きいとした「宋金郎」に集中していることである。ちなみに宝翰楼本の「宋金郎」は天啓帝の諱を憚り、「得病之由」を「得病之繇」としている。『警世通言』は天啓四年の叙を冠しており、この年の刊行とされる。よってその原刻本が避諱を厳密に適用していたのなら「得病之繇」であったはずなのだが、現存本はいずれもそうはなっていない。

以下で、相違が少ないとした諸篇の相違につきまとめて述べておく。「杜十娘」の宝翰楼本が万暦の三大寇を「西夏哮承恩 日本關白平秀吉 揚州楊應龍」の順に挙げるのに対し、『警世通言』は「日本關白平秀吉 西夏哮承恩 揚州楊應龍」とする。通常「万暦三征」は宝翰楼本のごとき順に挙げられるが、「杜十娘」では引き続いて「話中單表萬暦二十年間、日本國關白作亂、侵犯朝鮮。朝鮮國王上表告急…」とあるから、これにあわせて順を入れ替えたとも考えられる。「李謫仙」では『警世通言』にみえる漏刻が宝翰楼本で解消されている例があるが、常識的に推測可能な文字であるからいうほどのことはない。この

<sup>8</sup> 写字台文庫については、拙論「大連図書館「大谷本」稗史小説について 資料：「大谷本」対照一覧表」（『中国古典小説研究』第9号所収、2004年5月）を参照されたい。

<sup>9</sup> こうした点についても註7の拙論を参照されたい。

他の「老門生」「鈍秀才」「唐解元」「王嬌鸞」にも有意な相違はみあたらない。「兪伯牙」では伯牙が道で鍾子期の父に逢って子期の死を知らされる場面、「莊子休」では莊子の妻が夫の棺を斧で叩き割る場面に相違があるが、両者の先後関係を知る手懸りにはなりそうにない。

『今古奇観』と『警世通言』で大きく異なるのが「宋金郎」「呂大郎」の二篇である。

「宋金郎」においては、妻宜春の父に薪を集めに上陸させられた病気の宋金郎が、その間に纜を解かれた船に置き去りにされる場面が大きく異なる。『今古奇観』ではその間の経緯が、傍目にそれを見ていた宜春の心理をまじえて語られており、その後の両親との争いの場面の描写もやや丁寧である。

「宋金郎」の冒頭では、宋金郎と劉宜春双方の父親、宋敦と劉有才の二人が「最契之友」であって、ともに子が授からなかったことから連れ立って蘇州閭門外の陳州娘娘廟にお参りにゆくことになる経緯が語られる。そこで宋敦が棺を施した乞食和尚が金郎に生まれ変わり、劉有才の方に生まれた宜春と指腹婚の間柄となり後日結婚するのだが、金郎の両親が早逝しており本人も篤い病に罹ったことから、宜春の両親が置き去りにしてこれを厄介払いしようとする情節は展開するのだが、『警世通言』では蘇州ゆきの船に乗る場所が「北門大坂橋下」となっているのに対し、『今古奇観』では「在小西門駟馬橋下」となっている。おそらく当時の現地の事情を反映し、どちらかが意図して変更したものに相違ないが、現状では両者のいずれが本来のものかわからない。

「呂大郎」は短い入話と正文とからなっている。入話は女房がお布施をする老僧を砒素入りの饅頭で殺そうとして自身の二人の子を亡くしてしまう金員外の話であり、正文はトイレでみつけた銀をねこばせず落とし主の現れるのを待って還したところ、以前攫われ行方不明となっていた息子にその家でめぐりあえ、帰途、礼にもらった金を賞金として溺れている人々を救ったらそのなかに末弟がおり、その知らせで急ぎ帰郷すると、次弟に売り飛ばされるところだった妻の王氏が、被り物が暗闇で取り替わるといふ偶然により難を逃れ、かえって次弟の女房が連れ去られていたとする、呂玉大郎を主人公とする話であるが、『今古奇観』と『警世通言』の相違は正文部分に集中している。ただし、入話の、宝翰楼本 2a4 に見える金員外のあだ名、金冷水、金剥皮の所以を「凡損人利己の事、無所不為。真是一善不作、眾惡奉行」と説明する部分については、「呂大郎」の主旨との関係で注目される。なぜならこの部分が『警世通言』には存在しないからである。『古今小説』の「金玉奴」もそうであったが、『今古奇観』には勸善懲悪を強調する傾向があるようである。

正文における宝翰楼本と『警世通言』との相違は、次の二箇所集中している。

『今古奇観』では、呂大郎の息子喜児を買って育てていた銀の落とし主陳朝奉が、呂大郎の語る攫われた息子が自分の育てている子だと気づいて呼び寄せたところ、呂大郎も喜児も一目で相手が分かったとするのだが、『警世通言』では、喜児の方は呂玉が実父とは気づかない。再会の時に十三歳、攫われたのが七年前なら、いくら数え年でも親の顔くらいは覚えていようから、『今古奇観』の展開の方が自然といえよう。

さらに、たがいの被り物が取り替わったため呂大郎の妻王氏が難を逃れる下りであるが、『警世通言』では次弟の妻楊氏が王氏に同情的な人物に描かれて



おり、代わりに攫われる結末では楊氏が気の毒になってしまう。これに対し、『今古奇観』では悪人とまではいえずとも、夫の次弟に協力的で不実な人物に描かれているから、読者の後味の悪さは減殺されよう。仮に一方が他方を修改したのなら、『警世通言』を『今古奇観』のように改めたとみるのが妥当であろう。なお、かつて「宋金郎」の女主人公である宜春が『警世通言』では当初宜男とよばれ、後にいきなり宜春と変わる点を不審と指摘した<sup>10</sup>が、『今古奇観』では一貫して宜春となっている。これも『今古奇観』が改正したとみるべきで、途中で改名工作进行を放棄した可能性はあるまい。とすれば、『警世通言』所収の作品には完成度において劣る作品が複数あり、抱甕老人(または墨憨齋。以後は断らない限り抱甕老人をこの意味で用いる)はそれを意図的に改めたということになるであろう。

### 三 『醒世恒言』に出自をもつ十一篇

『今古奇観』には『醒世恒言』に出自をもつ作品が以下の十一篇収められている。

- 卷1 三孝廉讓産立高名（『醒世恒言』卷2,  
以下卷2「三孝廉」のごとく略記する）
- 卷2 両県令競義婚孤女（卷1「両県令」）
- 卷7 売油郎独占花魁（卷3「売油郎」＊）
- 卷8 灌園叟晚逢仙女（卷4「灌園叟」）
- 卷15 盧太学詩酒傲公侯（卷29「盧太学」＊）
- 卷16 李汧公窮邸偶侠客（卷30「李汧公」＊）
- 卷17 蘇小妹三難新郎（卷11「蘇小妹」）
- 卷25 徐老僕義憤成家（卷35「徐老僕」）
- 卷26 蔡小姐忍辱報讐（卷36「蔡小姐」＊）
- 卷27 錢秀才錯占鳳凰儔（卷7「錢秀才」＊）
- 卷28 喬太守乱点鴛鴦譜（卷8「喬太守」）

『醒世恒言』の初期の版本としては、原刻本とされる金閨葉敬池本（葉敬池本）とその同版後印本とされる金閨葉敬溪本（葉敬溪本）が知られる。葉敬池本は内閣文庫に蔵され閲覧が容易で影印本も複数出版されているが、大連市図書館に蔵される写字台文庫旧蔵の葉敬溪本は、現在所在不明なため確認ができないが、葉敬池本の同版後印本とみる説<sup>11</sup>で誤りはなさそうである。とはいえ葉敬池本を原刻本とみるのは誤りの可能性が高く、原刻本にしても後修本となろう（後述）。

『醒世恒言』には、『喻世明言』や『警世通言』と同様、明刊後修本とされる十行二十字の24巻本があり、東京大学東洋文化研究所双紅堂文庫に蔵されている。この24巻本は『醒世恒言』に出自をもつ作品を二十二篇収めており（上記一覧の＊は24巻本未収の作品）、版本は葉敬池本系統のものと思われる。さらに、初期の版本とは認めがたいが、清刊とされる十二行二十二字の衍

<sup>10</sup> 註7の拙論を参照されたい

<sup>11</sup> 長沢規矩也「「三言」「二拍」について」（『長沢規矩也著作集第五巻 シナ戯曲小説の研究』所収、汲古書院、1985年2月）による。原載は『斯文』第10巻第9号、1928年9月。

慶堂本（四十篇本と三十九篇本が存する）もあって、これはかなりの機関に蔵されている。

既述のごとく、『醒世恒言』は叙の紀年により天啓七年の刊刻とされる。宝翰楼本の「盧太学」14a5には「本縣巡簡司解到強犯九名、贓物若干」の文言があった。この巡簡司は巡検司の検を崇禎帝の諱由検を憚って改めたものに相違ない。この部分に対応する葉敬池本は「新拿到一班強盜」となっている。また、天啓、崇禎両帝の諱に含まれる「由」を宝翰楼本はすべて繇とするが、葉敬池本は繇と由を混用している。のみならず、「盧太学」の場合など、同一作品の近接した箇所にも両者が出現する。葉敬池本の27a5には「怎樣情繇」とあり、28b9には「由他自搶」とあった。対する宝翰楼本には23a7に「怎樣情繇」がみえるが、「由他自搶」に相当する箇所は表現を異にしている（上海図書館蔵の『今古奇観』は「怎樣情繇」を「怎樣情由」としており、清刊本とみなせる）。宝翰楼本の『今古奇観』は避諱を厳密に適用して版下を作成したが、『醒世恒言』（や『警世通言』）はそうではなかったようだが、同一の篇にも両者が出現するのは不可解である。この点については後述したい。

ひるがえって、葉敬池本には『古今小説』『警世通言』と同様の「つめこみ」が六箇所存在し、誤刻も少なくない。誤刻としては、宝翰楼本「灌園叟」2b10が正しく「其甘如飴」とするものを葉敬池本が「其北如飴」とし、「徐老僕」1b10が「那宰相」とするものを「那宰在」とするものなどを挙げておきたい。こうした「つめこみ」「誤刻」を除くなら、先の十一篇のうち「三孝廉」「兩県令」「灌園叟」「蘇小妹」「徐老僕」「蔡小姐」「喬太守」「錢秀才」の八篇に有意な相違は存在しないようである。

以下では相違の大きい残る三篇について個別に論じたい。

「売油郎」の場合、決定的で有意な相違が一箇所ある。客を取ろうとしない莘瑤琴（王美）を鴛母の王九媽に替わってその結義妹子の劉四媽が説得にあたる有名な場面がそれで、そこにみえる掛枝児の冒頭を、宝翰楼本が正しく「劉四媽、你的嘴舌兒好不利害，便是女隨何雌陸賈」とするのに対し、葉敬池本はなぜか「劉四媽」を「王九媽」としていた。これが葉敬池本を原刻本とはみなしがたい理由である。原刻本であれば、いかに版刻のレベルが低くとも、こうした誤刻はしまい。葉敬池本が「重刻」本であるなら、王九媽とするのは葉敬池のさかしらで、宝翰楼本の本文は原刻本を含む葉敬池本に先行する版本を襲っているということになる。いずれにせよ、劉四媽を王九媽に改める合理的な理由は存在しない。

残る二篇については、行論の都合もあり、順序を改め「李汧公」の方からみてゆくことにする。「李汧公」の情節は以下の通りである。

唐の天宝年間のこと、ひょんなことから盗賊の頭領にまつりあげられた長安の士人房徳が、最初の襲撃に失敗し捕えられる。その将来性をみてとった取調べ官の李勉がこれを逃亡させる。房徳は後に安祿山に見込まれ栢県の知県に任命された。一方、李勉は房徳を逃亡させた罪に問われ罷免される。栢県で李勉を見かけた房徳は、かつての恩に報いようとする。だが報恩の経費を惜しむ妻貝氏に言い負かされ、逆に李勉殺害を計る。李勉に逃げられた房徳夫婦は侠客に暗殺を依頼するが、事実を知った侠客に殺される。李勉は後に監察御史中書門下平章事に昇り、汧国公に封ぜられた。

宝翰楼本と葉敬池本の相違は巨細に互るが、李勉が房徳の屋敷から路信の援

けをえて脱出する場面と、房徳が陳顔の手引きで侠客に会う場面の前後に集中している。たとえば、宝翰楼本では「收拾馬匹上路。又行了兩日」とある部分が、葉敬池本では「收拾馬匹上路。説話的、據你說、李勉共行了六十多里方到旅店。這義士又無生口、如何一夜之間、往返如風。這便是前面説起、頃刻能飛行百里、乃劍俠常事耳。那義士受房徳之托、不過黃昏時分。比及追趕、李勉還在途中馳驟、未曾棲息、他先一步埋伏等候(ママ)、一往一來、有風無影、所以伏于床下、店中全然不知。此是劍術妙處。且說李勉當夜無話、次日起身、又行了兩日」となっていて、あたかも講釈師の語り口を彷彿とさせるものになっている。とはいえ「李汧公」に先行するいわゆる話本は存在せず、明人の創作とみられる<sup>12</sup>から、いずれの文本が先行するものかをそうした語り口の有無によって決めることはできない。

ひるがえって、先に引いた「前面説起、頃刻能飛行百里、乃劍俠常事耳」は、陳顔が房徳に侠客の存在を知らせ、これを指嗾して李勉を暗殺させることを勧める際に、侠客の凄技としてあげる「能飛劍取人頭、又能飛行、頃刻百里」に対応しているのだが、無くても差し支えない部分であった。概してではあるが、葉敬池本はより口語的な、宝翰楼本はより文語的な表現を好むといえそうであるが、これもそれによっていずれの文本が先行するものかを定める手懸りとはなるまい。だが「盧太学」における相違は情節に関わるから、その決め手となる可能性がある。

「盧太学」の情節は以下の通りである。大名府濬縣人盧柁は自身の家産と才能ゆえに新任の知県汪岑に謙ることができず、憎まれ陥れられ、逮捕拷問のあげく獄中で殺される寸前までゆく。なんとか命拾いはしたものの、冤罪を晴らそうとする試みにはそのたびに横槍が入り、入牢は十数年に及んだ。何代目かの後任知県の尽力で釈放された盧柁は出獄後の人生を余生とみなし、詩酒に耽る生活を送るが、采石磯で仙人に誘われ姿を消す。以上が両者に共通する部分の情節であるが、途中の経緯と最後の結末に大きな相違が存在している。まず途中の経緯の部分を実験本によって紹介したい。

知県の汪岑は呼んでも来ない盧柁にじれ、自らその屋敷を訪れることにするが、体面もあり、あらかじめ訪問の日時を約し、迎えさせることにこだわる。ところがそのたびごとに支障が生じ、約束を違えることが重なってしまう。挙句、欲に目が眩み、強盗事件の取り調べにかかずらわり、訪問の約束を失念してしまう。盧柁はとうとう堪忍袋の緒を切らし、準備していた酒を独酌し泥酔してしまう。そこへ調べが空振りに終わり約束を思い出した知県がやって来る。迎えを受けられなかった知県はこれを根に持ち、盧柁の僅瑕を見つけて陥れるべく捕方の譚遵を督励する。おりから盧柁の家人盧才が貸金を取り立てようとして盧家の小作鈕成に暴行し、後日鈕成が死ぬという事件が起こった。譚遵は下手人を盧柁とする訴状を捏造させ、知県に盧柁を捕えさせる。以上については両者の文本に大差はないのだが、知県の来訪が遅れる原因となった強盗事件と、盧才が起こした過失致死事件の経緯に大きな相違があった。

まず前者をみてみよう。知県が衛河の盜賊を取り調べることに変わりはない。

<sup>12</sup> 『太平広記』巻195所収の「義俠(出原化記)」により敷衍したもので、佐藤晴彦「『醒世恒言』における馮夢龍の創作(Ⅱ)―言語的特徴からのアプローチ」(『神戸外大論叢』第41巻第4号所収、1990年9月)は、これを馮夢龍以外の明人の創作とする。

この後、宝翰楼本は、知県の命じた夾棍の拷問に耐え切れなくなった賊のひとりがでたらめな供述をし、その供述がでたらめとわかった知県の命じた再度の拷問で死に、興覚めとなった知県がようやく盧柁との約束を思い出すとなっている。これに対する葉敬池本は以下のようにになっている。賊のなかに石雪哥というものがいて、肉屋の王屠を一味として誣告する。王屠は無実を、石雪哥は共犯を一貫して主張し、決着がつかない。知県はじれ、ふたりとも死刑として入牢させうえで盧柁の家に向かう（一齊發下死囚牢裏，起身上轎到盧柁家去喫酒，不題）とした後、石雪哥が王屠を誣告したゆえんと、秋後の処刑のおり、いまわの際だから真実を聞かせろと迫る王屠に石雪哥がそれを語るとする後日譚をおいた後、「閒話休題」としてやっと本筋にもどることになっている。両者の展開のいずれが優れているかと問われるなら、筆者は文字通りの閒話を長々と語る葉敬池本より宝翰楼本に軍配をあげたい。

続いて後者の相違につき検討しよう。貸金を取り立てようと待ち構えていた盧才を鈕成が奴才と罵ったため、鈕成が盧才とこれに加勢する盧柁の家人に袋叩きにされて死に、譚遵が鈕成の妻金氏と兄の鈕文に指示して盧柁を誣告する訴状を書かせるとする点では両者一致する。だが、この間の経緯を宝翰楼本が譚遵に仕える鈕文を訪ねてきた金氏の口から語らせるのに対し、葉敬池本は盧柁が以前汪岑から贈られた書儀を送り返してきたところで「話分兩頭」と話題を転じ、「却説浮丘山脚下有箇農家，叫做鈕成，老婆金氏」と、鈕成の借金の経緯について述べ、そのなかで盧才は金氏に思召しがあり、それで鈕成に金を貸したのだが、金氏がなびかず、しかもそれを知った鈕成が借金を踏み倒そうとしたためいさかいになったと講釈師に語らせる（你道為何）。両者の展開のいずれがすぐれているかと問われれば、筆者はこちらについても宝翰楼本に軍配をあげたい。葉敬池本の「盧太学」は閒話が多く、情節の展開が散漫だからである。案ずるに、葉敬池本が浮丘山脚下の農家とわざわざ言及しているのは、巻頭の詩の第一句に「衛河東岸浮丘高」とあることと関係しよう。宝翰楼本にも同じ巻頭詩があるから、この詩は『醒世恒言』の原刻本にもあったはずである。しからば「盧太学」の、知県の来訪が遅れることになった衛河の強盗事件と家人の起こした過失致死事件それぞれの情節については、いずれも葉敬池本が本来のものであって、宝翰楼本はこれを修改しすっかりさせたと考えべきであろう。

それなら『醒世恒言』原刻本の「盧太学」の文本は葉敬池本と同様だったと認めてよいかというと、やはりそうではなさそうである。

葉敬池本の「盧太学」では、盧柁が冤罪を晴らし釈放してくれた知県の陸光祖に礼を述べにいったにもかかわらず対等の礼を求めたこと、二人がその後「至友」となったことを述べ、「有詩為証」と七言絶句をあげたところで第40葉が終わり、次の第41葉は唐突に「李学士祠中作書，寄謝陸公，不携行李，隨着那赤脚道人而去」で始まり、盧柁が「遇仙成道」したことが仄めかされ、二首の詩が挙げられて全篇が締め括られている。これに対し、宝翰楼本は「盧柁の釈放を阻もうとした汪岑がかえって免職になったこと、南京吏部尚書となった陸光祖をたよって南京にやってきた盧柁が采石磯の李白祠で赤脚道人に逢い、その携えていた酒が気に入る」、光祖へ手紙を残し、かの道人に随って廬山五老峰にいったと語る。

以上にその情節を括弧書きした葉敬池本に存在しない部分の宝翰楼本の文字数はちょうど四百字であって、半葉十行二十字の倍、つまり版木一面分に相当している（すべて散文だから版面に空白部分はないはずである）。葉敬池本には上引のごとく「那赤脚道人」とあるのだが、それ以前の部分にこの赤脚道人は一度も登場していない。これはおかしい。以上によれば、葉敬池本は本来第41葉だったはずの葉を脱していると考えねばなるまい。ところが版心の丁数は連続していた。通常版木は表裏両面に連続した二葉分が刻される。それゆえ本来の第41葉のみならず第42葉も失われていたはずである。ところが葉敬池本には本来第42葉だったはずの葉が第41葉として存在していた。しからば版心の「四十二」の「二」を「一」に変えて辻褃あわせした可能性は考えにくい。おそらく、製本の段階で本来の第41葉を欠く先行版本の印本を版下とし、第42葉の版心のみ改めて「重刻」したか、そうした「重刻」本を版下とし再度「重刻」したかのいずれかであろう。いずれにせよ葉敬池本が『醒世恒言』の原刻本である可能性はないことになる。ちなみに葉敬池本の問題の第41葉にも「つめこみ」が存在していた。

先に、「盧太学」にみえるふたつの事件の情節について、葉敬池本が本来のものであって、宝翰楼本はこれを修改したものかと述べたが、ここで改めて宝翰楼本が葉敬池本の後修本あるいは「重刻」本ではないことを、証拠を挙げ確認しておきたい。葉敬池本が欠くとした四百字二十行一葉分の文本であるが、宝翰楼本ではふたつの葉に跨っており、先の想定に合致しない点がそれである。ここで注意しておかなければならないのは、衍慶堂本所収の「盧太学」には原第41葉に相当する部分が存在している点である。しかも、その点を除けば、衍慶堂本の文本はすべて葉溪池本に一致しているのである。つまり衍慶堂本の方が葉敬池本より古い『醒世恒言』の文本の様相を反映していると思われるのである。ただし、衍慶堂本は十二行二十二字本であるから、これを葉敬池本が依拠した先行版本とすることは出来ない（そもそも衍慶堂本は清刊とされていた）。だがその版本の行款を変えた直系の子孫とみなすことは可能であろう。ちなみに、衍慶堂本は葉敬池本に比し簡筆字が少ないという特徴があった。こと古典小説の版本に限っては、古いから尊いとはゆかないようである。なお、問題の原第41葉が葉溪池本に存在しない理由であるが、版木の喪失や単純な脱葉の可能性もあるが、免職になったと語られる汪岑のモデル、嘉靖十七年の進士蔣宗魯<sup>13</sup>の子孫からのクレイムの可能性も考えられるかもしれない。

#### 四 『拍案驚奇』に出自をもつ八篇

『今古奇観』には『拍案驚奇』に出自をもつ作品が以下の八篇収められている。

- 卷9 転運漢巧遇洞庭紅（『拍案驚奇』巻1、  
以下巻1「転運漢」のごとく略記する）
- 卷10 看財奴刁買冤家主（巻35「看財奴」）
- 卷18 劉元普双生貴子（巻20「劉元普」）
- 卷29 懐私怨狼僕告主（巻11「懐私怨」）

<sup>13</sup> 杜聯詰「明人小説記当代奇聞本事举例」（『清華学報(新)』第7巻第2号所収、1969年8月）の「(十) 盧柁獄」による。

- 卷 30 念親恩孝女藏兒（卷 38「念親恩」）
- 卷 37 崔俊臣巧合芙蓉屏（卷 27「崔俊臣」）
- 卷 39 誇妙術丹客提金（卷 18「誇妙術」）
- 卷 40 逞多財白丁橫帶（卷 40「逞多財」）

『拍案驚奇』の版本には十行二十字本の系統と十一行二十四字本の系統があるが、後者は清刊の 36 巻本であって、明刊の 40 巻本は前者のみである。この系統の現存最古の版本は封面に「金閻安少雲梓行」を銘打ち、「尚友堂印」の白文方印を捺す日光輪王寺慈眼堂所蔵の金閻安少雲尚友堂刊本（40 巻本）であり、封面に「（初刻）拍案驚奇」「本衙藏板翻刻必究」を銘打ち、版心に「尚友堂」の文字がみえる広島大学文学部所蔵の 39 巻本がこれに次ぐ。このほか複数の十行二十字の 36 巻本が現存するが、それらはいずれも尚友堂本の「覆刻」<sup>14</sup>「覆刻的覆刻」<sup>15</sup>などとされている。

40 巻本には崇禎元年の序が冠されるが、「初印本ではない」<sup>16</sup>という。39 巻本は 40 巻本の巻 23 を削除し、代わりに巻 40 を巻 23 として重刻<sup>17</sup>し挿入したものである。ではなぜ原巻 23 を削除したのか。すでに、その版本を次節で論ずる『二刻拍案驚奇』の巻 23 として使ってしまったからである。したがって 40 巻本『拍案驚奇』の巻 23 と『二刻拍案驚奇』の巻 23 は同版の早印と後印の関係にあると思われる（40 巻本未見のため確言できない）。なお、39 巻本『初刻拍案驚奇』に先行して『二刻拍案驚奇』が刊行されたとわかるのは、39 巻本の挿絵が三十葉に過ぎず、本来『二刻拍案驚奇』のものであった挿絵をも含み、排列もばらばらだからである。以下にその順を示しておこう。

1ab、2ab、10ab、8ab、二刻 7ab、二刻 3ab、24ab、22ab、26ab、29ab、14ab、9ab、12ab、13ab、35ab、37ab、17a、16b、5ab、3ab、11ab、34ab、28ab、31ab、32ab、18ab、25ab、27ab、33ab、7ab、4ab

注目すべきは、『二刻拍案驚奇』に出自する二葉四図を除く二十八葉五十六図の 39 巻本の挿絵のなかに、40 巻本のそれと絵柄が異なるものが存在している点であろう。これは『拍案驚奇』の少なくとも一部の挿絵については「重刻」（ないしは重修。以下では単に「重刻」とする）された可能性があることを意

<sup>14</sup> 長沢規矩也・阿部隆一共編の「佐伯文庫現存古書分類目録」（『佐伯藩政史料目録』所収、佐伯市教育委員会、1979 年 3 月）は、佐伯文庫旧蔵の 36 巻本の、封面に「金閻藏板」を銘打ち、「東溪」の朱文円印と「読書最楽」の白文角印を捺す『拍案驚奇』を「尚友堂刊本ノ覆刻ナラン…北京大学所蔵本ト同版ナルベシ」とする。

<sup>15</sup> 王古魯は、「金閻藏板」を銘打つ 36 巻本の北京大学所蔵馬廉旧蔵本『拍案驚奇』につき、「覆尚友堂本和消閑居初刻拍案驚奇」（『初刻拍案驚奇』附録二、1957 年。『王古魯小説戯曲論集』所収、中華書局、2013 年 1 月）で「這部書已經是覆刻的覆刻了」とする。なおまた柳存仁は、版心に尚友堂の文字がみえる 36 巻の英国皇家亞洲学会蔵の富文堂藏板本につき、「我疑心這是覆尚友堂本，当同於北京大学図書館所蔵」とする（『倫敦所見中国小説書目提要』，龍門，1967 年。書目文献出版社，1982 年 12 月）。

<sup>16</sup> 長沢規矩也編『日光「天海藏」主要古書解題』（日光輪王寺，1966 年 11 月）による。

<sup>17</sup> 『拍案驚奇』（上海古籍出版社，1985 年 7 月）の章培恒「影印《拍案驚奇》序」による。根拠は挙げられていないが、39 巻本では韻を踏むべき「開」の文字を「門」に誤刻しており、眉批もひとつ少ないから、その結論に誤りはなさそうである。なお本文に目立った相違はない。

味する。一例を挙げれば、39 卷本 25a の挿絵は、40 卷本の挿絵に比し机上の調度が少なく、25b の挿絵は障壁の影から覗く人物が描かれない。とはいえ 39 卷本でも 40 卷本と同様、17a の挿絵に続き 16b の挿絵が配されており絵柄も一致するから、39 卷本の挿絵の版木に 40 卷本のそれを流用したものがあることも確かである。

39 卷本は、現存の『二刻拍案驚奇』刊行後に、これにあわせた 39 卷構成とすべく、『二刻拍案驚奇』に流用した 40 卷本の巻 23 に替え原巻 40 を新刻して新たな巻 23 とし、挿絵については、当時使用可能な 40 卷本の挿絵の版木に加え、『二刻拍案驚奇』の版木まで動員し、なんとか三十葉にして刊行したものだと思いたい。

ちなみに挿絵が「重刻」されたとすればその時期はいつか。39 卷本刊行のためにそれがなされた可能性はあるまい。なぜ一部だけにそれがなされ、『二刻拍案驚奇』の挿絵の版木まで動員されたかを合理的に説明できないからである。筆者としては、39 卷本刊行以前に一回以上、40 卷または 39 卷の刊本が刊行されており、挿絵の一部「重刻」はそのいずれかのおりになされたのだが、現存 39 卷本刊行の時点では、以前より傷みが進み使用不能な挿絵の版木が増えたにもかかわらず、新たに挿絵の「重刻」はなされなかったとみたい。

三言の場合と異なり、39 卷本に「つめこみ」はみられない。上記八篇中、「由」を「繇」としている箇所は宝翰楼本で二箇所、39 卷本で四箇所と異なるが、後者の二箇所は宝翰楼本では脱葉となっている部分（「誇妙術」の 11 b-15 b 4）に見えるから、両者ともに避諱を守っていた可能性がある。この場合、宝翰楼本、39 卷本（即 40 卷本。以下では単に 39 卷本とする）とも明代に開雕された版木によって印刷されたものとなろう。

三言と異なり、二拍所収の作品の題名は対句構成となっている。『今古奇観』のそれは三言と同様の単句であるから、二拍の作品が『今古奇観』にとられる場合、題名には対句のいずれか一方の句がとられる場合が多いが、「懐私怨」「念親恩」「誇妙術」ならびに「逞多財」の場合はそうっていない。そうしたやむをえざる変更に関わる相違を別にすれば、「看財奴」「念親恩」「逞多財」の三篇に有意な相違はないといってよい。「転運漢」の場合も表現の相違の範囲にとどまっている。

「転運漢」より多めに字句を変えたと思われるのが「劉元普」と「懐私怨」の二篇である。39 卷本の「劉元普」は、その陰徳ゆえに劉元普本人ならびに子孫が「蕃衍不絶」だったことを語った後、「這本話文出在空緘記，如今依傳編成演義一回，所以奉勸世人為善」の一文があり「有詩為証」以下で終わるのだが、『今古奇観』には上記の一文がなかった。ちなみに『空緘記』は王元壽（字伯彭，陝西部陽人，事跡無考）の作とされるが、現存していない<sup>18</sup>。

「懐私怨」の相違を論ずるに先立ってはその情節を紹介する必要がある。「懐私怨」は入話と正文とからなっているが、以下に紹介するのは正文の情節である。

生薑売りを殴って気絶させ、詫びに酒食を供し土産まで持たせて帰した王杰が、たまたま浮いていた土左衛門をその死体に仕立てた渡し場の船頭にゆすら

<sup>18</sup> 祁彪佳『遠山堂曲品』ならびに莊一弘『古典戯曲存目彙考』（上海古籍出版社，1982 年 12 月）による。

れる。一年後、死体を埋めさせられた王杰の下男が、医者と呼ばれにゆく途中酒を飲み時宜を失したことを咎められて逆恨みし、殺人で王杰を訴える。事件は死んだはずの生薑売りがひょっこり現れたことで解決するのだが、その医者 of 姓が『拍案驚奇』では馮だったのに対し、『今古奇観』では徐となっていた。

正文の原話「湖州薑客」（『夷堅志』補卷 5）を収める『新編分類夷堅志』は嘉靖二十五年に杭州の清平山堂から刊行されていた（丙集卷 3）。ただこれには医者が登場しない。『智囊補』卷 27 の「永嘉舟子」もこれと同話で、「據此條（「湖州薑客」）刪略而成，故内容尽同」<sup>19</sup>とされるように、やはり医者は登場しない。『曲海總目提要』卷 40 の「賺青衫」によれば、無名氏の「賺青衫」劇には呂慕陽なる医者が登場し、薑客呂大に代わる役割を果たしていたようだが、これは「懷私怨」以後の創作であるらしい<sup>20</sup>。しからば「懷私怨」の医者は凌濛初が初めて登場させた人物ということになる。仮に「湖州薑客」と異なる原話が存在し、そこに「姓馮」の医者が登場して、「懷私怨」はそれを忠実に襲ったにすぎなかったにしても、『今古奇観』がわざわざその姓を改める必要があったとは思えない。筆者は『拍案驚奇』がこの医者を馮姓とし、『今古奇観』がそれを改めたことを、凌濛初ならびに『今古奇観』の手定者抱甕老人の「姓馮」への強いこだわりのなせるわざとみている。抱甕老人には馮夢龍またはその関係者である可能性があると考えたいのである。

「誇妙術」には「懷私怨」と同程度以上の相違が認められるのだが、上述したように宝翰樓本が四葉分近くを佚失しており確言はできないものの、有意な相違はなさそうである。ただし『拍案驚奇』には「戴着兩個丫頭」とする誤刻が一箇所(7b7)あり、『今古奇観』では「戴」が「帶」に正されている。ちなみに同様な誤刻は「崔俊臣」13a4 にも見える。「俊臣一眼睜去見了，不覺泣然垂淚」が、「俊臣一眼睜着，面色俱變，泫然垂淚」となっていた。しからば『拍案驚奇』の 40 卷本にも原刻本ではない可能性、原刻本にしても質のさして高くない原刻本である可能性がありそうである。

「崔俊臣」は『拍案驚奇』と『今古奇観』の間で最も相違が大きい一篇である。「崔俊臣」は入話と正文とからなり、入話は『新編分類夷堅志』戊集卷 5 の「王從事妻」（丁志卷 11）に、正文は李昌祺の『剪燈餘話』卷 4 の「芙蓉屏記」によっている。両者の相違は入話と正文それぞれのほとんど一言一句に及ぶが、とりわけ正文に目立つ。妻の王氏をともなった崔俊臣が永嘉に赴任する際に雇った船戸が強盗に早変わりする。命乞いした俊臣が水中に投げ込まれるのを見た王氏は死を覚悟するが、船戸に次男の嫁にと見込まれたのを幸便に、復讐の機会を窺いつつこれにまめまめしく仕え、隙を窺って逃げ出す。相違はこれ以降の部分に顕著なのだが、注目されるのは以下の部分である。

<sup>19</sup> 譚正璧編『三言兩拍資料』（上海古籍出版社，1980年10月）による。

<sup>20</sup> 『曲海總目提要』の「賺青衫」に以下の記述がある。

據小説，王生名杰，劇增作人杰。温州永嘉人，劇改作淮安人。小説薑客呂大湖州人，劇改医生呂慕陽杭州人。家童胡阿虎，劇云胡虎兒。薑客竹籃，劇改医生葉箱。王生贈呂白絹，劇改青衫。王生初悞傷呂客，其後因女出痘，使阿虎請医生，阿虎酒醉失帖，悞期一日，其女痘瘍，王生痛責阿虎，乃被出首，劇合兩段事為一節。問官永嘉令明時佐，劇作淮安守石万程。阿虎，周四俱斃杖下，劇云虎兒大穉，周四充軍，此其異同處。



船戸により王氏が身を隠していた尼庵に寄進された崔俊臣の芙蓉の絵を王氏が夫のものと認め、仇討ちの希望を托してそこに臨江仙の詞を書きつける。尼庵にやってきた郭慶春がこれを譲り受け、つてを求め、かねて書画を好むと知る御史大夫の高納麟に献上する。高納麟に家庭教師として雇われたばかりの崔俊臣が絵に書かれた詞の筆跡から妻の生存を知り、事態が急展開する。この間、情節は偶然の連鎖によって展開されている。その最たるものが、芙蓉屏が献上された当日、高納麟が郭慶春を送るため門前に出たまさにその時に崔俊臣が自らの書を手売りとして通りかかり（送慶春出門來別了。只見外面一个人、手裡拿着草書四幅）、一目見てその書が気に入った高納麟が崔俊臣を孫の塾師に雇うことに決め、承知した俊臣をもてなすため書房に酒席を設けたところ、その席で俊臣が芙蓉屏とそこに書かれた詞に気づくという部分なのだが（忽然抬起頭來、恰好前日所收芙蓉屏正張在那里。俊臣駿去見了，不覺泣（泫）然垂淚。…站起身來再看看，只見上有一詞）、『今古奇觀』ではそれが別の日の出来事として語られているのである（待我慢慢觀玩。又一日，只見門首一人，手拿着草書四幅）。

では『剪燈餘話』の「芙蓉屏記」ではどうなっているのか。「公置于内館，而未暇問其詳。偶外間忽有人賣草書四幅」となっているから『今古奇觀』に近い。いわゆる「話本」の特徴は、文中で講釈師が「事有湊巧，物有偶然」あるいは「事有鬪巧，物有故然」と述べ、偶然を当然として情節を展開させる点にあった。『拍案驚奇』の「崔俊臣」はあたかもその典型的な例のごときであるのだが、そこには矛盾が存在していた。上手の手から水が漏れているのである。崔俊臣が高納麟にもてなされたのは郭慶春を見送った当日のはずである。だから崔俊臣が「前日所收芙蓉屏」を見たとするのでは平仄が合うまい。これは修正漏れに違いない。その一方、両者に見える「只見」は『拍案驚奇』のごとく連続する時間において情節を転換する際に使われるものであったから、「又一日，只見」では間が抜けてしまう。この間の事情として筆者が現在考えているのは以下の通りである。

凌濛初が「芙蓉屏記」から「崔俊臣」を創作する際、芙蓉屏の献上と崔俊臣の塾師就任を同日のこととすべく、高納麟に郭慶春を門外まで見送らせ、そこへたまたま崔俊臣が通りかかることにして「只見」を書き加えた。だが（凌濛初の初稿を含む）先行する文本にあった「前日」を修正し忘れてしまった。抱甕老人がこの矛盾に気づき、「只見」の前に「又一日」を加えることにしたが、高納麟が門前で崔俊臣に逢うという設定はそのまま元に戻さなかった。それゆえ「只見」は削れなかった（あるいは削れなかった）。だが、これでは「只見」がいかにも唐突であるし、高納麟が門前を出てきている理由が説明されないことになってしまう（そもそも引退したとはいえ御史大夫だった高納麟が金持ちにすぎない郭慶春を送りに門前まで出て来るか疑問だが、その点はこの点では問わない）。

最後に、39巻本のみならず、すべての挿絵がそろっている40巻本においても39巻本と同様巻17第1面（以下では17-1のように記す）の挿絵に続き巻16-2の挿絵が配されている理由につき、筆者の仮説を述べておこう。そもそも40巻本は巻16と巻17の挿絵の排列に誤りがあり、16-1、17-2、17-1、16-2の

ように配されていた<sup>21</sup>。これは 16-1 と 17-2、17-1 と 16-2 がそれぞれ同一の版面に刻されていたことを意味している。しからばこの誤配が生じた所以は、挿絵の版下の下絵を描く際、または下絵を版木に貼り付ける際に生じた手違いに由来するに相違ない。39 巻本の挿絵が巻 17 と巻 16 に限って一面ずつであって配列も逆になっているのは、それが 40 巻本の挿絵の版木か、または誤配に気づかず「重刻」した挿絵の版木をそのまま流用したものかのいずれかによったものであることを示していよう。やはり 39 巻本刊行の時点では、挿絵の版木の一部が失われるか使用不能となっていたに相違ない。

## 五 『二刻拍案驚奇』に出自をもつ三篇

『今古奇観』には『二刻拍案驚奇』に出自をもつ作品が以下の三篇収められている。

巻 34 女秀才移花接木（『二刻拍案驚奇』巻 17、  
以下巻 17「女秀才」のごとく略記する）

巻 36 十三郎五歳朝天（巻 5「十三郎」）

巻 38 趙県君喬送黄柑子（巻 14「趙県君」）

『二刻拍案驚奇』は、内閣文庫蔵本（内閣本）が唯一の現存する版本である。この版本、封面を欠くため刊行書肆は不明だが、版心の「尚友堂」の文字により通常尚友堂本とよばれている。内閣本は「即空観填詞」を銘打つ全九折の雜劇「宋公明鬧元宵雜劇」を巻 40 に収め、巻 23 は既述のごとく『拍案驚奇』巻 23 の版木を版心のみ「拍案驚奇」から「二刻驚奇」に改め流用したもの（尾題は「拍案驚奇」のまま）であるから、内閣本で新出の白話短篇小説は三十八篇となる。

この三十八篇の巻首題は、「二続拍案驚奇」とする巻 5、「二刻驚奇」とする巻 16 を除き「二刻拍案驚奇」であるが、巻 5 においては版心も末尾の一葉を除き「二続驚奇」であり、「二刻拍案驚奇巻之五終」とする尾題の「刻」の文字が挖改とみられることにより、この巻同様版心の「好幾頁」が「二続驚奇」となっている巻 9 とともに、『二刻拍案驚奇』後に編写された『二続拍案驚奇』から補入された可能性が指摘されている<sup>22</sup>。その可能性を否定することはできないが、版心を「二続驚奇」とする葉はほとんどの場合、偶数葉連続して出現するから、筆者としては一部の刻工の粗忽に由来すると考えたい<sup>23</sup>。なお『二

<sup>21</sup> 40 巻本は上海古籍出版社の『拍案驚奇』（1985 年 7 月）に巻 40 が、瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成(五) 三言二拍集』（遊子館、2007 年 11 月）に挿絵が影印されている。40 巻本の挿絵の乱丁については瀧本の解説「『三言二拍』の挿絵についての覚書」を参照されたい。

<sup>22</sup> 章培恒は「影印《二刻拍案驚奇》序」で以下のように述べている。

今本《二刻》實有四篇（巻 5、巻 9、巻 23、巻 40 を指す）係従他書補入、而凌濛初在《二刻拍案驚奇》之後似還編寫過《二續拍案驚奇》，因為「二刻拍案驚奇」即續拍案驚奇之意，《二續拍案驚奇》自當在《二刻拍案驚奇》之後。

<sup>23</sup> 版心に「二続驚奇」の文字が見える巻 9 の葉は、第 5 葉～第 6 葉、第 9 葉～第 16 葉、第 23 葉～第 24 葉である。巻 8 の第 19 葉、巻 14 の第 5 葉～第 10 葉、第 15 葉～第 16 葉も版心を「二続驚奇」とするが、章培恒はこの両巻については補入候補としない。見落としたのであろう。なお巻頭の挿絵の巻 1 と巻 5 の版心は「拍案驚奇像」であるが、これも流用ではなく粗忽によるものと思しい。

刻拍案驚奇』巻頭に冠される即空観主人の「二刻拍案驚奇小引」によれば「四十則」の原刻本が存在していたはずであるが、その現存は知られていない<sup>24</sup>。

『二刻拍案驚奇』は巻頭に即空観主人の崇禎壬申(五年)の小引を冠するが、同じ小引を冠する白話短篇小説集に34巻からなる『拍案驚奇二集』がある。ただし上記の「四十則」の「四十」については空白とする。そもそもこの小引は『拍案驚奇』編纂の経緯から説き起こしており、それを「遂為鈔撮成編、得四十種」としている<sup>25</sup>のだが、『拍案驚奇二集』の小引はこの「四十種」まで「卅四種」に改めてしまっている。にもかかわらず挖改の痕跡はないから、文字は酷似していても、『二刻拍案驚奇』の小引をもとに新たに版を起こしたものであろうか。

この『拍案驚奇二集』、巻1から巻10までは十行二十字、巻11以降は九行二十字からなるから、「版本ノ寄セ集メ<sup>26</sup>」であることは一目瞭然で、前半の十篇が『二刻拍案驚奇』に、後半二十四篇が『型世言』に出自することが明らかになっている<sup>27</sup>。『型世言』については必要に応じて言及するとどめ、以下では『二刻拍案驚奇』に出自する前半の十篇(「二集本」とよぶ)について論じたい。

二集本は、順に『二刻拍案驚奇』の巻11、15、17、18、16、6、7、8、9、10に相当する諸篇を収める。このうち巻15と巻17は内閣本と題名を異にする。のみならず、二集本では巻1(11)の第27葉、巻2(15)の第1葉～第6葉、第17葉、第22葉、巻3(17)の第1葉～第2葉、第13葉～第14葉、第21葉～第22葉、第27葉～第32葉、第37葉、巻5(16)の第19葉、巻9(9)の第3葉～第4葉が新刻されている。しかも、その前後の葉が内閣本と対応するようには対応せず、巻2(15)の場合など、第7葉～第10葉までを欠いているにもかかわらず、情節は矛盾なく接続しているのである。すなわち高度なテクニクを駆使した情節の修正、それも大規模な修正がなされているのである。先に巻15と巻17は内閣本と題名を異にすると述べたが、それはそれぞれの巻の第1葉が新刻されたことと関連しよう<sup>28</sup>。以上に述べた新刻葉の最も多い作品が巻

<sup>24</sup> 「二刻拍案驚奇小引」は以下のようにいう。

賈人一試之而效，謀再試之。余笑謂，一之已甚。顧逸事新語，可佐譚資者，乃先是所羅而未及付之于墨。其為拍案餘材，武昌剩竹，頗亦不少，意不能忍，聊復綴為四十則。

<sup>25</sup> 「二刻拍案驚奇小引」は以下のようにいう。

丁卯之秋，事附膚落毛，失諸正鵠，遲迴白門。偶戲取古今所聞一二奇局可紀者，演而成說，聊舒胸中磊塊。非曰行之可遠，姑以游戲為快意耳。同儕過從者索閱，一篇竟，必拍案曰：奇哉所聞乎。為書賈所偵，因以梓傳請。遂為鈔撮成編，得四十種。

<sup>26</sup> 註14の「佐伯文庫現存古書分類目録」による。

<sup>27</sup> 『型世言』については、拙論「二刻から三刻へ幻影をめぐって」(『漢学研究』第6巻第1期所収，1988年6月)、「二刻から三刻へ(補)」(『中国古典小説研究動態』第2号所収，1988年10月)ならびにこれらを修正し、あわせて当時の研究状況を紹介した「『型世言』研究について」(『中国古典小説研究動態』最終号所収，1994年6月)、『型世言』の続篇『清夜鐘』について論じた「二続研究前後」の一(『中国古典小説研究』第3号所収，1997年12月)を参照されたい。

<sup>28</sup> 巻15と巻17はそれぞれ「韓侍郎婢作夫人 顧提空掾居郎署」が「江愛娘神護做夫人 顧提控聖恩超主政」に、「同窗友認假作真 女秀才移花接木」が「男美人拾箭得婚 女

17(3)で、『今古奇観』では巻34に収められる「女秀才」であった。

二集本の「女秀才」は、内閣本の第3葉～第12葉、第15葉～第20葉、第23葉～第26葉、第31葉～第36葉に相当する部分については一言一句改めず、第1葉～第2葉、第13葉～第14葉、第21葉～第22葉、第27葉～第30葉、第37葉に相当する部分については、情節を前後の葉と無理なく接続させる前提のもとに大胆に改めていた。とはいえ、内閣本の「女秀才」に存在する眉批は二集本には存在しないし、前者に見える版心の「尚友堂」の文字も後者には見えないから、新刻葉にあわせ『二刻拍案驚奇』に由来する葉についても版心の「尚友堂」の文字や眉批を削って版木を流用したと思しい<sup>29</sup>。だが、二集本の『型世言』に由来する篇にもごく少数ではあるが版心に「尚友堂」の文字が見える葉がある。『型世言』の原刻本が『二刻拍案驚奇』と同じ頃に钱塘の書肆崢嶸館から刊行されたことはまず間違いない。したがって、尚友堂が『型世言』の刊刻に関わったのはその後のことになるが、具体的な状況はわからない。『拍案驚奇二集』を刊行した書肆が尚友堂か否かも不明だが、その時期はおそらく清代であって、その理由は『型世言』の命名の由来でもある「型世」思想<sup>30</sup>にあったものと思われる。

ひるがえって、先に挙げた三篇についていえば、『今古奇観』はもちろん、『二刻拍案驚奇』にも「つめこみ」は見あたらない。避諱についていえば、宝翰楼本の「十三郎」で二箇所、「趙鼎君」で一箇所、由を繇としていた。これに対する内閣本であるが、「十三郎」の場合、一箇所しか避諱はなされていないが、もう一箇所はそもそも文言を異にしており問題はない。ところが、「趙鼎君」においては、「不由分説」となっていて、諱を避けていない。内閣本には後世の補刻葉が混じっているか、作品ごとに避諱への対処に精粗があったかのいずれかであろう。なお、内閣本の版木の大半が明代に刻されたことは、明朝をいずれも一字空格をあけ、巻6で国朝、天朝、巻31で国朝といていることに鑑みまず間違いあるまいが、これを初印本はもちろん原刻本ともみなすことは適当であるまい（墨格も見える）。原刻葉を含む後修本とみておくのが妥当であろう。

ひるがえって、宝翰楼本には漏刻が目につく。たとえば宝翰楼本の「十三郎」4a1は十三郎の帽子につき、「又是五色寶石攢簇，乃是」とした後の十字を欠き「也不知值多少錢鈔」に続くが、これ以降に刊行された『今古奇観』や内閣本はいずれも「鴉青祖母緑之類，這頂帽」の十字を備えている。既述のごとく、宝翰楼本の本文は後半の巻になるほど欠落箇所や邇邇葉が目につく。それゆえ上述の漏刻についても一応宝翰楼本が後印本だったことに由来すると考えられるが、依拠したこれに先行する『二刻拍案驚奇』がすでにそうした部分を欠いていたとも考えられなくはない。

先に挙げた三篇に存在する相違で興味深いのは「十三郎」に見えるものであ

---

秀才移花接木」に変更されている。

<sup>29</sup> 陳慶浩は『型世言』（中央研究院中国文哲研究所，1992年11月）の「導言—一部佚失了四百多年的短篇小説集《型世言》的發現和研究」で、『拍案驚奇二集』を「小引重刻挖改，取正文十回覆刻，部分葉修改重刻」としている。

<sup>30</sup> 『型世言』の「型世」思想については註27に挙げた拙論「二刻から三刻へ—幻影をめぐって」を参照されたい。

ろう。「十三郎」の情節は以下の通りである。北宋神宗朝の大臣王襄敏公韶の十三男小名南陔が五歳のおり元宵節のにぎわいを見物していかどわかされる。だがとっさに知恵を働かせたため無事だったのみならず、悪党の一味を一網打尽にした。これが数年前宗王家の真珠族姫をかどわかし、乱暴したあげく妾に売り飛ばした一味だったため、十三郎は神宗から褒美を頂戴し、父の王韶は面目を施した。

「十三郎」は『程史』巻1の「南陔脱帽」と『新編分類夷堅志』丁集巻2(補巻8)の「真珠族姫」を出自とするふたつの犯罪を巧みに繋ぎ合せたものであるが、相違は多く真珠族姫がかどわかされる部分に存在する。

内閣本はその15a4から16a9にかけ、以下のように記す。

其時有一个宗王家在東首。有个女兒名喚真珠。因趙姓天潢之族，人都稱他真珠族姫。年十七歲，未曾許嫁人家。顔色明艷，服飾鮮麗，耀人眼目。宗王的夫人姨妹族中却在西首。嬢娘曉得外甥真珠姫在帷中觀燈，叫个丫鬢走來相邀一會。上覆道：若肯來，當差兜轎來迎。真珠姫聽罷，不勝之喜。便對母親道：兒正要見見嬢娘。恰好他來相請，是必要去。夫人亦欣然許允。打發丫鬢先去回話，專候轎來相迎。

過不多時，只見一乘兜轎打從西邊來到帷前。真珠姫孩子心性，巴不得就到那邊頑耍。叫養娘們問得是來接的，分付從人隨後來，自己不耐煩等待，慌忙先自上轎去了。

纔去得一會，先來來的丫鬢又領了一乘兜轎來到，說道：立等真珠姫相會，快請上轎。王府裡家人道：真珠姫方纔先隨轎去了，如何又來迎接。丫鬢道：只是我全這乘轎來，那里又有甚麼先到。家人們曉得有些蹊蹊了，大家忙亂起來，聞之宗王。着人到西邊去看，眼見得決不在那里的了。急急分付虞候祇從人等四下找尋，並無影響。急具事狀告到開封府。府中曉得是王府裡事，不敢怠慢，散遣緝捕使臣挨查踪跡。王府裡自出賞揭，報信者二千貫。竟無下落，不題。

且說真珠姫自上了轎後，但見轎夫四足齊舉，其行如飛。真珠姫心裡道：是頃刻就到的路，何須得如此慌走。却也道是轎夫脚步慣了的，不以為意。及至抬眼看時，倏忽轉灣，不是正路。漸漸走到狹巷裡來，轎夫們脚高步低，越走越黑。心裡正有些疑惑，忽然轎住了。轎夫多走了去，却不見有人相接。これに対する宝翰楼本はその15a2から16b5にかけ以下のように記している。

其時有一个宗王家眷，在東廡下張設帷幙，擺下酒榖觀看燈火。那時金吾不禁人海人山，語言鼎沸喧天振地，更有那花砲流星你放我賽。那宗王有个女兒，名喚真珠姫，年方十七，未曾許嫁人家。顔色明艷，服飾鮮麗，耀人眼目。娃子家心性喜的是頑耍。他見恁般熱鬧，不免舒頭探腦向幙外張望。

常言：慢藏誨盜，冶容誨淫。却動了一夥劇賊的火。宗王家眷正在看得興濃處，只見一個女僧揜入幙來。自夫人以下各各問訊了。便立在真珠姫身邊。夫人正問那尼僧：你是那處尼僧。忽見眾人一齊發起喊來。却被放花砲的失手，燒了帷幙，烟焰滿幙。眾女眷一時忙亂，你撞我跌，亂搶出幙來。急得那真珠姫沒走一頭處。那女僧叫道：莫要慌。隨我來。一把扯著真珠姫的手，在人叢中揜至隙處，見放著一乘兜轎，女僧連忙扶真珠姫入轎坐了。女僧便對轎夫說：你轎若空閑，快抬這小姐到王府裏去。多賞你酒錢，我隨後跟來。轎夫應道：當得，當得。扶轎上肩，四足並舉，其行如飛。莫說真珠姫是幼年閨女，就是

男子漢、到如此倉卒、也要著了道兒。

且放著真珠姫上轎的事、再說王府家眷。帷幙被燒、驚得亂攏、眾人擁上來拽倒帷幙、幸而火息、不曾延燒別家帷幙。自宗王夫人以下及養娘丫鬟婢女等輩、簪珥釵釧都被人搶去、盞牒粉碎。虞候幹辦家人也都失去帽、擠落鞋。一家敗興、聚集在一搭兒、人人都在、只不見了真珠姫。當時四下呼喚找尋、並無影響。那時宗王聞報、教夫人等眾快回王府、連夜差人出招出揭：報信者賞錢三千貫、收留者五千貫。滿城挨訪、鬧了數日、杳無音信、不題。

且說真珠姫當夜在轎中深以為幸、甚感尼僧。坐還未穩、倏忽轉灣。心頭小鹿、不住的撞。思想夫人等眾不知如何光景。只見轎夫脚高脚低、越走越黑、舉眼看時、却是空闊所在、喧鬧之聲漸遠。真珠姫見不是日裏來的舊路、心裏正有些疑惑。忽然住了轎、轎夫多走了去、却不是自家府門。

原話の「真珠族姫」の情節はむろん内閣本のように展開している。一度宝翰樓本のように創作された後、先祖帰りして内閣本のようにになるとは考えにくい。『今古奇観』の「十三郎」は、原話を忠実に受け継ぐ『二刻拍案驚奇』の「十三郎」の真珠族姫誘拐事件の情節を一新したものだと思しい。「呂大郎」や「盧太学」がその典型であるが、『今古奇観』には、三言二拍ではさらっと描かれる犯罪の経緯や悪巧みの裏面、犯罪者の心理などを微に入り細を穿って描く傾向があるようである。

### 小結

『古今小説』に出自する『今古奇観』の諸篇（以下では「古今小説諸篇」とよぶ）の文本に最も近い現存する『古今小説』の版本は尊経閣本である（よって以下では尊経閣本で『古今小説』を代表させる）。三言の明刊本とされる十行二十字本のいずれにも「つめこみ」が見られる。尊経閣本もその例外ではないし、誤刻のみならず漏刻も見られる。だから、現存版本のなかで最も『古今小説』の原刻本に近いにしても、原刻本とはみなせない。尊経閣本の誤刻（多くは同音字）を古今小説諸篇は正しく刻しており、「つめこみ」や漏刻も見られない。だが、古今小説諸篇は『古今小説』の原刻本に依拠しこれを忠実に反映したものかという、そうはならなさそうである。古今小説諸篇が原刻本を忠実に反映したものなら、これとの相違がさしてない尊経閣本に「つめこみ」が出現する理由が合理的に説明できなくなってしまう。「つめこみ」はつめこみのない文本の修正を次行以降に影響を及ぼさないために行うものであって、「つめこみ」のない文本の存在を前提にして初めて理解できる底のものである。一般論として、「つめこみ」や誤字の多い版本が先行する版本の「重刻」本である可能性は高い。とはいえ「つめこみ」のない文本が先行版本であるとは必ずしもいえない。原刻本のために準備した版下に紙を貼って修正した後に刻することもあったらうからである。この場合なら、「つめこみ」や修正漏れによる誤刻が存する版本であっても原刻本の資格は残る。そもそも原刻本に「つめこみ」や誤刻などないはずだという思い込みは、白話小説に限っては捨てた方がよいかもしれない。とはいえ版下のあからさまな誤字が修正されなかったとすれば、版下作成者の素養のほどは疑われよう。結局筆者としては、版下に修正がなされた原刻本の「重刻」本、それが尊経閣本であるとみておきたい。それなら古今小説諸篇はどういう性格のものともみなすのか。現在筆者は古今小説諸篇を『古今小説』の原刻本にもとづき、その体裁を整え、一部に追加修正を

加え、避諱を厳密に適用するなどしたものともみている。

次に『警世通言』に出自する『今古奇観』の諸篇（警世通言諸篇）について考えてみたい。警世通言諸篇の文本に最も近い現存する『警世通言』の版本は佐伯本である（よって以下では佐伯本で『警世通言』を代表させる）。ただし相違の目立つ篇が複数存在している。佐伯本にも誤刻（多くは同音字）や「つめこみ」が見える（漏刻も存在するが、版木が磨滅した結果そのように見えるにすぎまい）。既述のごとく、『警世通言』の「つめこみ」の手法は『古今小説』とは異なる。一字増やしたい箇所前後数字の字間を狭め、一字分の余剰を生み出しているのである（『醒世恒言』も同一手法をとる）。この手法、修正にかける手間は増えるが、「つめこみ」が気づかれにくくなる利点があった。ちなみに、警世通言諸篇は佐伯本の誤刻を正しく刻しており、「つめこみ」や漏刻も見られない。

警世通言諸篇と佐伯本の相違は「宋金郎」と「呂大郎」に目立ち、それは字句や表現の範囲にとどまらず、情節にまで及んでいる。語られる事件の重要な情節がまるごと変わっているのである。そうした点については再述しないが、佐伯本「宋金郎」の女主人公の名が当初の宜男から途中で宜春に変化しているのに対し、警世通言諸篇の「宋金郎」でははじめから宜春である点については再度指摘しないわけにはゆかない。人名、それも女主人公の名が途中で変わるのとは尋常ではないからである。佐伯本が原刻本に近いものであるのなら、警世通言諸篇の「宋金郎」はそれによりつつ、このあからさまな不都合を修正したものに相違ない。

それなら警世通言諸篇に見える人名以外の、情節に関わる部分の相違は原刻本の文本を反映したものなのか、それともそれを修正したものなのか。以後は筆者の臆測に近いが、人名の中途変更のごとき明らかな不備さえ修正しなかった佐伯本が先行版本（即原刻本）を修正したとは思えない。であるなら、警世通言諸篇の文本は抱甕老人により大胆に修正されたものといわざるをえない。ちなみにその際の方針であるが、「宋金郎」にせよ「呂大郎」にせよ、筆者には勧善懲悪と女性の貞節の強調にこだわった修正がなされているように感ぜられる。それは古今小説諸篇の「金玉奴」の末尾に加えられた一節に典型的に見えるものでもあった。

ひるがえって、先に述べた、佐伯本「宋金郎」で女主人公の名が途中で変わっている所以であるが、二匹目の泥鰌を狙い、鉄は熱いうちに打てとばかり入稿を急かされた（あるいは自らを急いだ）馮夢龍に版下原稿を読み返す暇がなかったためではなかったか。しからば『今古奇観』の警世通言諸篇のみならず、三言諸篇には馮夢龍自身による改訂決定版である可能性がでてこよう<sup>31</sup>。

次に『醒世恒言』に出自する『今古奇観』の諸篇（醒世恒言諸篇）について考えてみたい。醒世恒言諸篇に文本が最も近い『醒世恒言』は衍慶堂本である。だが清刊本の衍慶堂本に醒世恒言諸篇が依拠した版本である可能性はない。現存最古の版本である葉溪池本は原刻本の重修本ないし「重刻」本であって、醒世恒言諸篇「盧太学」末尾の、衍慶堂本にあり、原刻本ではちょうど版面一葉

<sup>31</sup> 佐藤晴彦「《警世通言》における馮夢龍の創作—言語的特徴からのアプローチ」（『神戸大論叢』第43巻第2号所収、1992年9月）は「宋小官（宋金郎）」を「馮夢龍創作の可能性が最も高いと推定する巻」としている。

分に相当したはずの四百字を欠いている。だから醒世恒言諸篇が葉溪池本に依拠していたはずはなく、これに先行する、おそらく原刻本によっていたに相違ない。一方、葉溪池本にも「つめこみ」や誤刻が存在しているから、欠落している一葉分を除けば、葉溪池本が最も『醒世恒言』の原刻本に近いはずである（よって以下では葉溪池本で『醒世恒言』を代表させる）。なお葉溪池本の「つめこみ」や誤刻は醒世恒言諸篇ではすべて正しく刻されている。

葉溪池本が原刻本の重修本にせよ「重刻」本にせよ、醒世恒言諸篇は抱甕老人による原刻本の修訂本となろう。両者の相違は「盧太学」と「李汧公」に顕著である。二篇はともに馮夢龍以外の明人の創作とされる<sup>32</sup>から、それを『醒世恒言』に収録する際、修正が間に合わなかったか飽き足らなかったかした馮夢龍が再度本格的に修正したもの、それが醒世恒言諸篇の「盧太学」や「李汧公」である、筆者は現在そのように考えている。

抱甕老人は馮夢龍が編纂した三言に対してのみならず、凌濛初の二拍に対しても容赦ない修改の腕を振るったと思しい。『拍案驚奇』に出自する『今古奇観』の諸篇（拍案驚奇諸篇）のうち飛び抜けて相違が顕著なものが「崔俊臣」である。

『拍案驚奇』の原刻本は40巻からなっていた。ところが、後日いまだ全貌が明らかになっていない経緯を経て、白話短篇小説三十九篇と戯曲一篇からなる『二刻拍案驚奇』が刊行されるに及び、39巻本に再編され、『初刻拍案驚奇』として再刊された。40巻本は唯一日光の輪王寺に蔵されているが、閲覧が難しく影印本もないため、原刻本か否か、39巻本と同版か否かを論ずることができない。以下で論ずるのは、39巻本を仮にこれと同版とみなし、『今古奇観』所収の拍案驚奇諸篇と比較対照した結果である。

39巻本には「つめこみ」はないが、誤刻が複数存在する。拍案驚奇諸篇はこれを正しく刻しているし（拍案驚奇諸篇にも誤刻が一箇所存在するが、版木が磨滅した結果とみられる）、39巻本の「崔俊臣」に存在している矛盾を正そうとした跡も認められる。加えて、拍案驚奇諸篇の「懐私怨」は、医者姓を39巻本の馮から徐に変えている。筆者はそれゆえ『今古奇観』の訂定者抱甕老人ならびに手定者墨憨齋のいずれかが馮夢龍であると考えている。この場合、手定者墨憨齋を馮夢龍とみるのが自然であり妥当であろう。問題は訂定者抱甕老人も馮夢龍か否かである。

『二刻拍案驚奇』は内閣本が唯一現存する。だがこれも原刻本とは認めがたい。『今古奇観』の二刻拍案驚奇諸篇はいずれも『二刻拍案驚奇』との相違が顕著であり、巨細に互る修正が施されている。だが、情節に関わる修正は「十三郎」の、元宵節のおりに起きた真珠族姫誘拐事件の顛末を語る部分のみであった。『二刻拍案驚奇』の「十三郎」は原話の「真珠族姫」をほぼ忠実に敷衍したものであるが、二刻拍案驚奇諸篇の「十三郎」はそれを一新しており、新たな構想により執筆されたものとみなせる。拍案驚奇諸篇の「崔俊臣」やこの「十三郎」を馮夢龍が凌濛初を意識しことさらに創作の腕を振るったものとみてよいものか。筆者はそれにはいささか躊躇を覚える。カエサルのはカエサルにという。『今古奇観』の二拍部分に手を加えたものはやはり凌濛初ではあるまいか。つまり手定者墨憨齋は馮夢龍、訂定者抱甕老人は凌濛初であって、

<sup>32</sup> 佐藤晴彦註12の論文を参照されたい。



二人は分担して三言二拍の選本である『今古奇観』を編纂した。その際、「懐私怨」の医者姓については凌濛初が馮夢龍に配慮し、自主的？にこれを改めたと考えたいのである。

最後に『今古奇観』の性格について、筆者の心得を述べ、拙論を締め括ることにしたい。『今古奇観』の目録で訂定者とされる抱瓮老人は凌濛初、封面で手定者とされる墨憨齋は馮夢龍であって、二人は共同して三言二拍のベスト本を作った。それに際しての馮夢龍の意識は、当初にあっては原刻本での修正漏れの追加修正、「つめこみ」による不体裁の解消に加え些少の加筆訂正を施す範囲にとどまっていたが、作業が進むにつれ、これにとどまらず、ハードな刊刻日程に追われ見逃した、依拠した先行作品や自身の作品に存在していた矛盾の訂正、刊刻後に案出した新構想への書き換えが加わり、後にはそれがむしろ中心となったと思しい。凌濛初の場合は、対象が自身の創作であったから、矛盾の解消や新構想への書き換えがより大胆になされたのはいうまでもない。

三言は馮夢龍の編集とされるが、馮夢龍自身の作品はむしろ少数で、前代から語り継がれてきた作品、明以降に成立した作品、馮夢龍の同時代人による作品など、さまざまな出自のもので構成されていた。では、馮夢龍が『今古奇観』に収録した作品はどのようなものだったのか。当然馮夢龍とその同時代人の作品が多かったはずである<sup>33</sup>。

仮に以上の筆者の想定に誤りがなければ、抱瓮老人が依拠した三言二拍の版本はそれぞれの原刻本であって、現存の版本で『今古奇観』の文本に近い三言の版本があれば、それは原刻本でないまでもそれに最も近い版本ということになるであろう。筆者は現在『今古奇観』とその編者、三言二拍の原刻本について以上のように考えている。

## 抱瓮老人与三言二拍的原刻本

《今古奇観》の訂定者抱瓮老人可认为凌濛初，手定者墨憨齋也可认为馮夢龍。他们都不满意自己编纂的三言二拍的成就。因此他们选择自己的做或修改的作品，再加修改做为定本而再刊了。这就是《今古奇観》。《今古奇観》的现存最古的版本是宝翰楼本。现存三言二拍的版本都不是原刻本。虽说如此，三言二拍原刻本的面貌，据《今古奇観》，尤其宝翰楼本可窥豹其一斑。

关键词：抱瓮老人、墨憨齋、馮夢龍、凌濛初、今古奇観、宝翰楼本、三言二拍、原刻本

<sup>33</sup> 佐藤晴彦の註12と註31の論文ならびに「《古今小説》における馮夢龍の創作—言語の特徴からのアプローチ」（『東方学』第72輯所収，1986年7月）によれば、『今古奇観』の三言に出自する作品二十九篇のうち十四篇が馮夢龍創作の可能性が最も高いしその次に高いとされる作品，八篇が馮夢龍以外の明人の創作と推定される作品となる。なお，残る七篇中二篇が『最娯情』（『小説伝奇合刊』）所収の作品（「兪伯牙」と「蘇小妹」）であることは注目される。『最娯情』と馮夢龍の関係については『情史』との関係同様今後検討される必要がある。また佐藤に「先行する「話本」が存する可能性がその次に高い」とされた「売油郎」「喬太守」の二篇や，判断を保留された「呉保安」「羊角哀」「三孝廉」の三篇にも馮夢龍ないし明人の創作である可能性が残ることになる。

今古奇觀・古今小說對照表初稿 ☆紫色字：異體字、口：空白、?:不明

今古奇觀	葉行	古今	葉行	內閣本、法政大學本與尊經閣本
3 滕大尹	1a3-5 3a5-6 3b2-5 4b3-5 12a10 19a9-19b6 24b5 26b6	10 一字さげ 一字さげ 一字さげ 一字さげ 一字さげ	10 1a3-5 3a5-6 3b2-5 4b3-5 12a10 19a9-19b6 24b5 26b5	二字さげ 二字さげ 二字さげ 二字さげ 善繼到吃了一驚 這屋(內破)家破火 無以為天報云 漏刻
4 裴晉公	2b2 5a7 8a1 10b9 11b2	9 即時交還婦人 六個女子 誥教 出來相見 私行體訪民情	9 2b2 5a7 8a1 10b9 11b2	即時交付與婦人 六個人 告教 出來相見了 私行要子 誤刻
11 吳保安	1b9-10 2b10 9b8 13b9 16b10	8 不肖保安 三字さげ三字間隔 止存枯骨二(?)具…練囊二(?)個裝保 安夫婦骸骨 有詩為証	8 1b9-10 2b10 9b8 13b9 16b10	內閣本、法政大學本吳保安不肖 二字さげ四字間隔 止存枯骨二具…練囊二箇裝保安夫婦骸骨 有詩為證
12 羊角哀	1a2 1a3 5a7 5b3-7 6b2	無 翻手 角哀再將衣服擁護伯桃已是寒入湊理 手直足挺氣息奄奄漸漸欲絕角哀尋思 三字さげ 到彼處安葬	7 1a2 1a3 5a7 5b1-5 6a10	(一本作羊角哀一死戰荊軻) 內閣本、法政大學本背(?)手尊經閣本番手 角哀尋思 二字さげ 到彼處安葬
13 沈小霞 絲	1b1, 1b8 1b8 3a5 3a8 4b2 5a5 5a9 6b10 12b9 19b2, 7, 20a2, 6 23a6 24a9 26b9 27a6 30b3 32b7 33a10 37b9 38b4 40a7 41a1 41a4	40 由 繇此, 繇是 不肖之人奔走如市 已自九分不樂 世蕃故意將巨觥飛到面前 就枕上思想疏稿想到天明已就起身焚 香盥手寫起奏疏疏中備說 有詩為証 且喜到了保安地方那保安州 急切難得中意 約齊同時發本 差人 你老爺…在家裏 愈加著急 年姪 兩個牌長 將尸首埋藏停當却來回復小婦人 無 無 監禁刑部牢中 時常展視如見吾兄之面 又到北京 舊時家產 供奉祠堂之中	40 由 1b1, 1b8 1b8 3a5 3a8 4b2 5a6 5a9 6b10 12b9 19b2, 7, 20a2, 6 23a6 24a9 26b9 27a6 30b3 32b7 33a10 37b9 38b4 40a7 41a1 41a4	天啓識字 つめこみ 世蕃故意將巨觥飛到面前 就枕頭上思想疏稿想到天明有了起來焚 香盥手寫就表章表上備說 有詩為証 且喜到了保安州了那保安州 衍字 急切難得中意的 約齊了同時發本 潑差人 主事老爺…在家裡 那有仁有義守孝在家的 年姪 兩個排長 將屍首埋藏停當却來回復我小婦人 道裡依繳了 監口刑部牢中 時常展(視如)見吾兄之面 內閣本、法政大學本又到此京 舊(時家)產 供奉在祠堂之中 つめこみ つめこみ
23 蔣興哥	1a4 46a缺 14b10, 16a3 29b10 37b10	1 萬事空花遊戲 休逞少年狂蕩 噹噹的敲响這件東西 三字さげ 更不疑慮 雇了船隻	1 1a4 7b9 14b10, 16a3 29b10 37b10	內閣本、法政大學本萬事空花遊戲○休逞少年狂蕩 噹噹的敲响响的這件東西 二字さげ 更不疑惑 雇船隻
24 陳御史	1b10 13b1 20a5 24b4 25a1 25b8	2 又不知可是自家的 悞其美事 一一說了 再挨幾日 口裡嫌醜道歉客人道你又不像個要買的 客人初時不肯想了一回叫聲沒奈何只要公道作價	2 1b10 13b1 20a5 24b4 25a1 25b8	又不知是自家的 悞其美事 內閣本、法政大學本一說了 再幾時 口裡只誇好布好布客人道你又不做箇要買的 客人道首飾也就是銀子只要公道作價
32 金玉奴	3a8 3b5 3b10 4a5 15a6	27 法政大學本缺 不回顧買臣愀然感慨不已 買臣妻之後夫 未見得強似朱買臣也 新太守舊夫人也 以報其恩莫稽年至五十餘先玉奴而卒其將死數日前夢神人對他說汝壽本不止此為汝昔日無故殺妻滅倫賊義上于神怒減壽一紀減祿三秩汝妻之不死再合亦是神明曲佑一救無辜一薄爾罪也莫稽夢覺嗟嘆對家人說夢中神語料道病已不起正是 舉心動念天知道 果報昭彰豈有私	27 3a8 3b5 3b10 4a5 15a6	頭也不回買臣感慨不已 買臣的後夫 未見得強似我朱買臣也 新太守夫人也 以報其恩



		16a1	鍾公感泣筵拜盤桓半晌而別		16a1	鍾公筵拜盤桓半晌而別
20	莊子休	11a9	覷定棺頭咬牙努力一斧劈去	2	11a9	用力劈去
		11b1	分付不得厚斂桐棺三寸(十)一斧就劈去了一塊木頭一連數斧棺蓋便裂開了婆娘正在吁氣喘息只見		11a10	不肯厚斂桐棺三寸一斧就劈去了一塊木頭再一斧去棺蓋便裂開了只見
21	老門生	7b5	五十七歲的怪物	18	7b5	五十七的怪物
22	鈍秀才	6a2	又有古玩書籍等項約數百餘金寄與黃勝家中那有司官	17	6a2	又有古畫書籍等項約數百金寄與黃勝家中去訖却說有司官
		6b10	却有誰人周濟		6b10	却誰人周濟我
31	呂大郎	1a8-9	凡損人利己的事無所不為真是一善不作眾惡奉行因此鄉里起他一個異名	5	1a8-9	因此鄉里起他一個異名
		2a4	福善菴		2a4	福善庵
		2b5	今日好利市難得他這八個錢勝似八百		2b6	今日好利市也攞他八個錢
		4a4	正在廳上喫茶		4a3	正在廳中喫茶
		4b1	萬桿鎗攢著腹肚		4a9	正在廳中喫茶
		5a8	兄弟中只有呂寶一味賭錢吃(喫)酒不肯學好老婆也不甚賢曉因此妯娌間有些面和意不和那王氏生下一個孩子		5a7	萬桿鎗攢却腹肚
		6b7	一日跟鄰舍家兒童出去看神會		6b6	王氏生下一個孩子
		6b9	只得自認晦氣罷了		6b7	跟鄰舍家兒童出去看神會
		8a9	失銀之事		8a6	只得自認晦氣罷了
		9a5	要與呂君攀一脈親往來但不知他有兒		8b1	失銀子之事
		9a8	陳朝奉聞言沉吟半晌問道恩兄令郎失去時幾歲了呂玉道剛剛六歲陳朝奉又(凡)問令郎叫甚麼名字狀貌如何呂玉道小兒乳名叫做喜兒痘瘡出過面白無麻陳朝奉聽罷喜動顏色便喚從人近前附耳密語從人點頭領命去了		9a2	要與呂君扳一脈親往來第不知他有兒子如今回去意欲尋個螟蛉之子出去幫扶生理只是難得這般湊巧的陳朝奉道舍下數年之間將三兩銀子買得一個小廝頗清秀又且乖巧也是下路人帶來的如今一十三歲了伴着小兒在學堂中上學恩兄若看得中意時就送與恩兄伏侍也當我一點薄敬呂玉道若肯相借當奉還身價陳朝奉道說那里話來只恐恩兄不用時小弟無以為情當下便教掌店的去學堂中喚喜兒到來
		9b3	呂玉見他盤問蹊蹊心中疑惑須與有個小廝走來年紀約莫十三四歲穿一領蕪湖青布的道袍生得眉清目秀見了客人朝上深深唱個喏便對陳朝奉道爹爹喚喜兒則甚陳朝奉道你且點著呂玉聽得名字與他兒子相同心中愈疑看那小廝面龐頗與兒子相似聽得他呼爹稱兒情知與陳朝奉是父子不好輕易啓齒動問悽慘之形於面貌目不轉睛看那小廝		9a5	呂玉聽得名字與他兒子相同心中疑惑須與小廝喚到穿一領蕪湖青布的道袍生得果然清秀習慣了學堂中規矩見了呂玉朝上深深唱個喏
		9b10	那小廝也舉眼頻睜		9b3	呂玉聽得名字與他兒子相同心中疑惑須與小廝喚到穿一領蕪湖青布的道袍生得果然清秀習慣了學堂中規矩見了呂玉朝上深深唱個喏
		9b10	呂玉忍不住問道此位是令郎麼陳朝奉道此非我親生之子七年前有下路人携此兒到這里說妻子已故止有此兒因經紀艱難欲往淮安投奔親戚中途染病盤纏用盡願將此兒權典三兩銀子一到淮安尋見親戚便來取贖學生憐他落難將銀付彼那人臨別涕泣不捨此兒倒不以為意那人一去不回		9b6	呂玉心下便覺得歡喜仔細認出兒子面貌來四歲時隱跌損左邊眉角結一個小疤兒有這點可認呂玉便問道幾時到陳家的那小廝想一想道有六七年了又問他你原是那裏人誰賣你在此那小廝道不十分詳細只記得爹叫做呂大還有兩個叔叔在家娘姓王家在無錫城外小時被人騙出賣在此呂玉聽罷便抱那小廝在懷叫聲親兒我正是無錫呂大是你的親爹了失了你七年何期在此相遇正是
		10a6	學生疑惑起來細問此兒方知是無錫人因看會失落被人哄騙到此父母姓名又與恩兄相同學生見他乖巧機密甚愛惜他將他與子女一般看待同小(×)兒在學堂中讀書學生幾翻思(要)到貴縣訪問恨無其便遣纈恩兄言語相□(同)物有偶然事有湊巧特喚他出來請恩兄親自認個詳細喜兒聽說流下淚來		10a2	呂玉心下便覺得歡喜仔細認出兒子面貌來四歲時隱跌損左邊眉角結一個小疤兒有這點可認呂玉便問道幾時到陳家的那小廝想一想道有六七年了又問他你原是那裏人誰賣你在此那小廝道不十分詳細只記得爹叫做呂大還有兩個叔叔在家娘姓王家在無錫城外小時被人騙出賣在此呂玉聽罷便抱那小廝在懷叫聲親兒我正是無錫呂大是你的親爹了失了你七年何期在此相遇正是
		10b2	呂玉亦淚下道小兒還有個暗記左膝下有兩個黑痣喜兒連忙捲褲解襪露出左膝果然有兩個黑痣		10a7	小廝眼中流下淚來呂玉傷感
		10b4	呂玉一見便抱喜兒在懷叫聲親兒我是你的親爹了失了你七年何期在此相遇正是		10b8	今奉些須薄禮相贖權表親情
		10b9	當下父子傷感		12a6	兼善堂本有人便說佐伯本有人傳說
		11a10	今奉些須薄禮權表親情		12b4	再說
		12b8	有人傳說		12b4	活龍活現
		13a6	且說		13a3	那客人也訪得呂大的渾家
		13a6	活龍活現			
		13b5	那客人訪得呂大的渾家			

	<p>先祭出去約定他每黃昏時候便來搶他上轎莫對他説言還未畢只聽得窓外脚步响呂寶見有人來慌忙走了出去却不會說明孝髻的緣故也是天使其然却是王氏見呂寶欲言不言情狀可疑因此潛來察聽彷彿聽得搶他上轎四字末後莫對他説這句畧高已被王氏聽在耳內心下十分疑慮</p>		<p>13b1 先祭出去黃昏時候你勸他上轎日裏且莫對他説呂寶自去了却不曾說明孝髻的事</p>
<p>14a3</p>	<p>只得先開口問楊氏道奴與嬌嬌骨肉恩情非止一日適纔我見叔叔語言情景莫非在我身上已做下背理的事嬌嬌與奴說個明白楊氏聽說紅了臉皮道這是那里説起姆姆你要嫁人也是不難却不該船未翻先下水</p>	<p>無</p>	<p>13b3 原來楊氏與王氏妯娌睦睦心中不忍一時丈夫做主沒奈何何欲言不言直接到西牌時分</p>
<p>14a6</p>	<p>王氏被他搶白了這兩句又惱又苦走到房中哭哭啼啼想着丈夫不知下落三叔呂珍尚在途中父母親族又住得窩遠急切不能通信鄰舍都怕呂寶無賴不敢來管閒事我這一身早晚必落他圈套左思右想無可奈何千死萬死總是一死只得尋個自盡罷主意已定挨至日暮密窺動靜</p>	<p>無</p>	<p>13b5 只得與王氏透個消息我丈夫已將姆姆嫁與江西客人少停客人就來取親教我莫說我與姆姆情厚不好瞞得你房中有什細軟家私預先收拾打個包裹省得一時忙亂</p>
<p>14a9</p>	<p>只見楊氏頻到門首探聽王氏見他如此連忙去了上控楊氏道姆姆也是好笑這早晚又沒有強盜上門恁般慌上控那魍魎還要回來一頭說一頭走去把控都(都把控)拔下來此時王氏已十分猜著坐立不寧心如刀割走到房中緊閉房門將條索子搭在梁上做個活落圈把個杌子襯了脚叫聲皇天與我報應歎了口氣把頭鑽入圈裏簪髻落地蹬開杌子眼見得不能教活了却是王氏祿命未終恁般一條粗麻索不知怎地就斷做兩截撲通的一聲顛翻在地</p>	<p>無</p>	<p>13b8 王氏啼哭起來叫天叫地起來楊氏道不是奴苦勸姆姆後生家孤孀終久不了吊桶已落在井裏也是一緣一會哭也沒用王氏道嬌嬌說那裏話我丈夫雖說已死不會親見且待三叔回來定有個真信如今逼得我好苦說罷又哭楊氏左勸右勸</p>
<p>14b3</p>	<p>楊氏聽得聲响急跑來看時見房門緊閉情知詫異急取木杠撞開房門黑洞洞的纔走進去一脚絆著王氏跌了一交簪髻都跌在一邊楊氏嚇得魂不附體爬起來跑到廚下點燈來看只見王氏橫倒地上喘氣口吐痰沫項上尚有索子緝住楊氏著了急連忙解放</p>	<p>無</p>	<p>無</p>
<p>14b9</p>	<p>忽聽得門上輕輕的敲响楊氏知是那話兒急急去招引他進來思想髻兒不在頭上不好模樣便向地上拾取簪髻忙亂了手脚自己黑的拾反拾了王氏白髻戴在頭上忙走出去探問</p>	<p>無</p>	<p>無</p>
<p>15a8</p>	<p>外邊江西客人已得了呂寶暗號引著燈籠火把抬著一頂花花轎吹手雖有一副不敢吹打在門上剝啄輕敲覺得門不上控一逕推開大門擁入裏面火把照耀早遇楊氏江西客人見頭上戴著孝髻就如餓鷹見雀趕上前一把扯著便走眾人齊來相幫只認戴孝髻的就搶搶出門去楊氏急嚷道不是眾人那里管三七二十一搶上轎時鼓手吹打轎夫飛也似抬去了一派笙歌上客船 錯疑孝髻是姻緣 新人若向新郎訴 只怨親夫不怨天 王氏得楊氏解去縊索已是甦醒聽得外面嚷鬧驚慌無措忽地門外鼓吹頓起人聲嘈雜漸漸遠去挨了半晌方敢出頭張望叫嬌嬌時那里有半個影兒心下已是明白取親的錯搶去了恐怕復身轉來急急關門收拾揀起簪珥黑髻歇息一夜不睡</p>	<p>無</p>	<p>無</p>
<p>15b3</p>	<p>黃昏過後江西客人引著燈籠火把抬著一頂花花轎吹手雖有一副不敢吹打如風似雨飛奔呂家來呂寶已自與了他暗號眾人推開大門只認戴孝髻的就搶楊氏嚷道不是眾人那裏管三七二十一搶上轎時鼓手吹打轎夫飛也似抬去了一派笙歌上客船 錯疑孝髻是姻緣 新人若向新郎訴 只怨親夫不怨天</p>	<p>無</p>	<p>14a3 王氏住了哭說道嬌嬌既要我嫁人罷了怎好戴孝髻出門嬌嬌尋一頂黑髻與奴換了楊氏又要忠丈夫之托又要姆姆面上討好連忙去尋黑髻來換也是天數當然舊髻兒也尋不出一頂王氏道嬌嬌你是在家的暫時換你頭上的髻兒與我明早你教叔叔舖裏取一頂來換了就是楊氏道使得便除下髻來遞與姆姆王氏將自己孝髻除下換與</p>
<p>15b7</p>	<p>黃昏過後江西客人引著燈籠火把抬著一頂花花轎吹手雖有一副不敢吹打如風似雨飛奔呂家來呂寶已自與了他暗號眾人推開大門只認戴孝髻的就搶楊氏嚷道不是眾人那裏管三七二十一搶上轎時鼓手吹打轎夫飛也似抬去了一派笙歌上客船 錯疑孝髻是姻緣 新人若向新郎訴 只怨親夫不怨天</p>	<p>無</p>	<p>14a10 黃昏過後江西客人引著燈籠火把抬著一頂花花轎吹手雖有一副不敢吹打如風似雨飛奔呂家來呂寶已自與了他暗號眾人推開大門只認戴孝髻的就搶楊氏嚷道不是眾人那裏管三七二十一搶上轎時鼓手吹打轎夫飛也似抬去了一派笙歌上客船 錯疑孝髻是姻緣 新人若向新郎訴 只怨親夫不怨天</p>
<p>16a7</p>	<p>王氏暗暗叫謝天謝地關了大門自去安歇</p>	<p>無</p>	<p>14b8 王氏暗暗叫謝天謝地關了大門自去安歇</p>

		<p>16b1 巴到天明起身梳洗正欲尋頂舊孝髻來戴只聽得外面敲門响叫聲開門却是呂寶聲音王氏惱怒且不開門任他叫得個喉乾口燥方纔隔著門問道你是那個呂寶聽得是娘子聲音大驚又見娘子不肯開門便哄道嫂嫂兄弟呂珍得了哥哥實信歸家快開了門王氏聽說呂珍回了(來)權將黑髻戴了連忙開門止是呂寶一個那里有甚呂珍</p> <p>16b8 呂寶走到房中不見渾家見娘子頭上戴的是黑髻心中大疑問道嫂嫂你娘子那里去了</p> <p>16b10 王氏道是你每自做的勾當我那里知道呂寶道且問嫂嫂如何不戴孝髻王氏將自己縊死繩斷髻落及楊氏進來跌失黑髻聞娶親的進來忙搶我孝髻戴了去的緣故說了一遍</p> <p>17a10 搬了行李貨物進門</p> <p>17b2 王氏也把搶去嬌嬌…怎能勾父子相見…</p>			<p>14b8 次日天明</p> <p>14b9 呂寶意氣揚揚敲門進來看見是嫂嫂開門喫了一驚房中不見了渾家見娘子頭上戴的是黑髻心中大疑問道嫂嫂你娘子那裡去了</p> <p>15a1 王氏暗暗好笑答道昨夜被江西蠻子搶去了呂寶道那有這話且問嫂嫂如何不戴孝髻王氏將換髻的緣故述了一遍</p> <p>15a10 馱了行李貨物進門</p> <p>15b3 王氏也把江西人搶去嬌嬌…怎勾父子相見…</p>
33	唐解元	<p>1a2 唐解元玩世出奇</p> <p>3b10 我們到城裏畧走一走</p>	26	<p>1a2 兼善堂本唐解元一笑姻緣</p> <p>佐伯本唐解元出奇玩世</p> <p>3b10 我們到城裡略走一走</p>	
35	王嬌鸞	<p>2b10 夜來張乙夫婦同牀此婦亦來就臥也忽見楊店舉家驚惶…向牌位苦叫竟不見出來了</p> <p>3a7 話說嬌鸞小姐</p> <p>5b4 蘇州府吳江人</p> <p>6a1 於中取事矣</p> <p>10a10 妾家原在臨安</p> <p>22a7 王翁聞得到也</p> <p>24b9</p>	34	<p>2b10 夜來張乙夫婦同床此婦亦來也忽見楊舉家驚惶…向牌位苦叫亦不見出來了</p> <p>3a7 話說鸞小姐</p> <p>5b4 蘇州府吳江人氏</p> <p>6a1 於中取事矣</p> <p>10a10 (妾家原在)臨安</p> <p>22a7 王翁也來了</p> <p>24b9</p> <p>つめこみ</p>	

今古奇觀・醒世恒言對照表初稿 ☆:紫色字:異體字、□:空白。?:不明、下線字( ):上圖本

今古奇觀	葉行	恒言	葉行	葉敬池本、衍慶堂本
1 三孝廉	4a3-4 6b3	三字さげ	2 4a6-7 6b3	二字さげ 長安(城中關得)孝弟許武之名つめこみ
2 兩縣合 2b-5a重複	3b4-5, 7 7a1 11b10	一字さげ	1 3b4-5, 7 7a1 11b10	二字さげ 只當賓客相待 叫賈逵莫恠
7 賣油郎	1a4 3a10 5a3 15b8 16a7 17a5 19a10 23a7 31a9 34a4 41b10 53b2	就是 三字さげ 三字さげ 三字さげ 句間三字 句間三字	3 1a4 3a10 5a3 15b8 16a7 17a5 19a10 23a7 31a9 34a4 41b10 53b2	有貌無錢不可○就是 亡☆ 王九媽 能小官人幾番?戲 要起个九晝夜功德 一喫一添 只為落於風塵 喫素持齋
8 灌園叟 30a遺選本	2b10 5a10, 19a3 13b14-15 26a7-8	其甘如飴 有詩為証 三字さげ 三字さげ	4 2b10 5a10, 19a3 13b9-10 26a7-8	誤刻 其北如飴 有詩為証 二字さげ 二字さげ
15 盧太學	1a7 2a2 2a5-2b2 2b4 3a5-9 3a10 3b5 4a1 4a3 4a7 4b5 5a9 6b4 10a5 11a5-8	那才子姓盧名楮字次梗 偏有盧楮立心要勝似他人 一字さげ 偶遇著个聲氣相投知音知己 三字さげ 乃是姓汪名峯少年連第意氣揚揚只是貪婪無比 有心要結識他做個相知…誰知盧秀才却是與他人不同別個秀才 但是知縣相請也沒有不肯去的偏是那盧楮被知縣一連請了五六次 他才高天下 這盧楮是個清奇古怪的主兒 山色環青 春風愁寂幾迴開 新按院不發起馬牌突然上汪知縣連夜起身往府 同門公依舊下船…上岸 三字さげ句間三字	29 1a7 2a2 2a6-2b3 2b5 3a6-10 3b1 3b5 4a1 4a4 4a8 4b5 5a10 6b5 10a5 11a5-8	那才子是誰姓盧名楮字少梗 偏盧楮立心要勝似他人 二字さげ 倘遇着个聲氣相投知音的知己 二字さげ 姓汪名峯少年連第貪婪無比 有心要結識他做個相知…你道有這樣好笑的事麼別个秀才 但知縣相請也沒有不肯去的偏有盧楮比他人不同知縣一連請了五六次 那盧楮才高天下 這盧楮已是个清奇古怪的主兒 山色送青 東風愁寂幾迴開 新按院到任連夜起身往府 同門公依舊下船…上☆ 二字さげ

11a9 那知縣一來是新病起的人  
 13a6 汪知縣也頗想要去看菊  
 13b4 三字さげ句間三字  
 14a2 上下兩席  
 14a4 三字さげ句間三字  
 且說汪知縣那日出堂便打帳完了投文  
 公事即便赴酌投文裏却有本縣巡簡司  
 解到強犯九名贓物若干此事先有心腹  
 報知乃是衛河大夥贓物甚多又無失主  
 汪知縣動了火即時用刑拷訊  
 崇禎諱字  
 內中一盜甚黠纔套夾棍便招某處藏銀  
 若干某處埋贓幾許一五一十般將出來  
 何止千萬知縣貪心如熾把喫酒的念頭  
 放過一邊便教放了夾棍差個心服吏帶  
 領健步衙役押盜前去眼同起贓立等回  
 話餘盜收監贓物上庫知縣退坐後堂等  
 那起贓消息  
 從辰至未承值吏供酒供食了兩次那起  
 贓的方纔回縣稟說却是怪異東墾西爬  
 並沒有半個錫皮錢兒知縣大怒再出前  
 堂弔出前犯一個個重新拷掠夾到適纔  
 押去起贓的賊那賊因眾人怒他胡說沒  
 有贓物已是拳頭脚尖私下先打過幾頓  
 又且司兵拷打壞的怎當得起再夾登時  
 氣絕知縣見夾死了賊也有些著忙便教  
 14b3 獄卒叫喚亂了半晌竟不甦醒汪知  
 縣心生一計喝叫且將眾犯還監明日再  
 審眾人會意將死賊混在活賊裏一擁扶  
 入監去誰敢道半個死字又向禁子討了  
 病狀明日做死囚發出汪知縣十分敗興  
 遂想著盧家喫酒即刻起身赴宴此時已  
 是申牌時分各役簇擁著大尹來到盧家  
 園來(內)

簡

無

無

無

11a9 那知縣一來是新起病的人  
 13a6 汪知縣正想要去看菊  
 13b4 二字さげ  
 14a2 上(下兩席) つめこみ  
 14a4 二字さげ  
 且說知縣那日早衙投文已過也不退堂就  
 要去赴酌因見天色太早恐酒席未完弔一  
 起公事來問那公事却是新拿到一班強盜  
 專在衛河裡打劫來往客商因都在娼家宿  
 歇露出馬脚被捕人拿住解到本縣當下一  
 訊都招  
 14a5  
 14a9 內中一個教做石雪哥又扳出本縣一個開  
 肉舖的王屠也是同夥即差人去拿到  
 知縣問道王屠石雪哥招稱你是同夥贓物  
 俱窩頓你家從實供招免受刑罰王屠稟道  
 爺爺小人是個守法良民就在老爺馬足下  
 開個肉舖生理平昔間就街市上十分行  
 走那有這事莫說與他是个同夥就是他面  
 貌從不曾識認老爺不信拘隣里來問平日  
 所行所為就明白了知縣又叫石雪哥道你  
 莫要誣陷平人若審出是扳害的登時就打  
 死你這奴才石雪哥道小的並非扳害真實  
 是同夥王屠叫道我認也認不得你如何是  
 同夥石雪哥道王屠我與你一向同做夥計  
 14b1 怎麼許不認得就是今日日本原要出脫你  
 的只為受刑不過一時間說了出來你不要  
 怪我王屠叫屈連天道這是那里說起知縣  
 喝交一齊夾起來可憐王屠夾得死而復甦  
 不肯招承這強盜咬定是箇同夥雖夾死終  
 不改口是已牌時分夾起日已倒西兩下各  
 執一詞難以定招此時知縣一心要去赴宴  
 已不耐煩遂依強盜口詞葫蘆提將王屠  
 問成斬罪其家私盡作贓物入官盡供已畢  
 一齊發下死囚牢裏即起身去轎到盧家  
 園去喫酒不題。  
 你道這強盜為甚死咬定王屠是箇同夥那  
 石雪哥當初原是箇做小經紀的人因染了  
 時疫症把本錢用完連幾件破家伙也賣來  
 喫在肚裏及至病好却沒本錢去做生意只  
 存得一隻鍋兒要把去賣幾十文錢來營運  
 度日旁邊却又有有些破的生出一箇計較將  
 鍋煤拌着泥兒塗好做箇神標兒提上街去  
 賣轉了半日都嫌是破的無人肯買落後走  
 到王屠對門開米舖的田二郎頭首叫住要  
 買那田二郎是箇近觀眼却看不出損處一  
 口就還八十文錢石雪哥也就肯了田二郎  
 將錢遞與石雪哥接過手剛在那里數明  
 不想王屠在對門看見叫道大郎你且仔細  
 看看莫要買了破的這是嘲他眼力不濟乃  
 一時戲謔之言誰知田二郎真箇重新仔細  
 15a9 一看看出那箇破損處來對王屠道早是你  
 說不然幾乎被他哄了果然是破的連忙討  
 了銅錢退還鍋子  
 石雪哥初時買成了心中正在歡喜次後討  
 了錢去心中痛恨王屠恨不得與他性命相  
 博只為自己貨兒果然破損沒箇因頭難好  
 開口忍着一肚子惡氣提着鍋子轉身臨行  
 時還把王屠怒目而視巴不能等他問一聲  
 就要與他撕鬧那王屠出自無心那箇去看  
 他石雪哥見不來招攬只得自去不想心中  
 16a3 氣悶不曾照管得脚下絆上一交把鍋子打  
 做千百來塊將王屠就恨入骨髓思想沒了  
 生計欲要尋條死路許那王屠却又捨不得  
 性命沒甚計較就學做夜行人到也順溜手  
 到擒來做了年餘嫌這生意微細合入大隊  
 裏在衛河中廻綽得來大碗酒大塊肉好不  
 快活





					<p>你道為何因見紐成老婆有三四分顏色指望以此為繇要勾搭這老婆誰知緣分淺薄這老婆情願白白裏與別人做些交易偏不肯上盧才的棒兒反去學向老公說盧才怎樣來調戲紐成認做老婆是箇貞節婦人把盧才恨入骨髓立意要賴他這項銀子盧才寬了年餘見這婆娘粧番做樣料道不能勾上釣也把念頭休了一味索銀兩下口紅了好幾場只是沒有有人教盧才箇法兒道他年年在你家做長工何不耐到發工銀時一併扣清可不乾淨盧才依了此言再不與他催討等到十二月中打聽了發銀日子緊緊伺候那盧才田產廣多除了家人顧工的也有整百每年至十二月中預發來歲工銀到了是日雇長工一齊進去領銀盧才恐家人們作弊短少了眾人的親自唱名親發又賞一頓酒飯喫箇醉飽叩謝而出</p> <p>剛至宅門口盧才一把扯住紐成問他要銀那紐成一則還錢肉痛一則恁他調戲老婆乘著幾盃酒與反撒賴起來將銀塞在兜肚裏罵道狗奴才只欠得這去銀子便生心來欺負老爺今日與你性命相搏當胸撞一箇滿懷盧才不會提防踉踉跄跄倒了十數步幾幾乎跌上一交惱動性子趕上來便打那狗奴才却又犯了眾怒家人們齊道這斷怎般放潑總使你的理直到底是我家長工也該讓我們一分怎地欠了銀子反要行兇打這狗才八齊擁上前亂打</p> <p>常言道雙拳不敵四手紐成獨自一箇如何抵當得許多人着實受了一頓拳脚盧才看見銀子藏在兜肚中扯斷帶子奪過去了眾長工再三苦勸方纔住手推着紐成回家</p> <p>不道盧才在書房中隱隱聽得門首喧嚷喚管門的查問他的家法最嚴管門的恐怕連累縱實稟說盧才即叫盧才進去說道我有示在先家人不許擅放私債盤算小民如有此等定行追還原券重責逐出你怎麼放違我法却又截搶工銀行兇打他這等放肆可惡登時追出兜肚銀子并那紙文契打了二十逐出不用分付管門的紐成來時着他來見我領了銀券去管門的連聲答應出來不題</p> <p>且說紐成剛喫飽得酒食受了這頓拳頭脚尖銀子原被奪去轉思轉惱愈想愈氣到半夜裏(?)火一般發熱起來覺道心頭脹悶難過次日便爬不起到第二日早上對老婆道我覺得身子不好莫不要死你快去叫我哥哥來商議</p> <p>自古道無巧不成話元來紐成有個嫡親哥哥紐文正賣與令史譚遵家為奴金氏平昔也會到譚家幾次路徑已熟故此教他去叫當下金氏聽見老公說出要死的話心下着忙帶轉門兒冒着風寒一徑往縣中去尋紐文</p> <p>那譚遵四處察訪盧才的事並無一件知縣又再三催到是個兩難之事這一日正坐在公廳中只見一個婦人慌慌張張的走入來舉目看時不是別人却是家人紐文的弟婦金氏向前道了萬福問道請問令史我家伯伯可在麼譚遵道到縣門前買小菜就來你有甚事恁般驚惶金氏道好教令史知得我丈夫前日與自盧監生家人盧才費口夜間就病起來如今十分沉重</p> <p>特來尋伯伯去商量</p> <p>譚遵聞言不勝歡喜道且說為甚與他家費口金氏即將與盧才借銀起直至相打之事細細說了一遍譚遵道 誤刻</p> <p>活活打死了</p> <p>鎖了大門囑付隣里看覷則個跟着…往縣裡去</p> <p>那盧才原是疏略之人兩日紐成不去領這銀券連其事却也忘了</p> <p>不在話下</p> <p>陪出酒漿與眾人先發個興頭一家點起一根火把</p>
			無	繇	23a4
21a5			無		23b8
			無		24a7
			無		24b1
			無		24b8
			無		25a3
		却說譚遵領縣主之命四處察訪盧才罪過日往月來挨至冬末並無一件事兒知縣又再四催促到是兩難之事一日在家悶坐正尋思盧監生無隙可乘只見一個婦人急急忙忙的走入來舉目看時不是別人却是家人紐文的弟婦金氏紐文兄弟叫做鈕成金氏年紀三十左近頗有一二分姿色向前道了萬福請問令史我家伯伯何在得遇令史在家却好(→1)			20b8
		(→2)特來尋伯伯去商量			21b6
		譚遵聞言不勝歡喜道			21b7
		怎地這般死得快			22a8
		鎖了大門央告隣里暫時看覷跟著…往縣裏去			22a9
		原來盧才於那日廝打後有人稟知備細怒那盧才擅放私債盤算小民重責三十追出借銀原券盧才逐出不用欲待紐成來稟給還借券			22b3
	繇(由)	不知去向			22b8
		陪出酒食與眾人發路一人點起一根火把			23b4
				繇	26a6
					27b2

		<p>24b10 盧椿全不在意忽見</p> <p>24a5 我有何事這等無禮不去便怎麼…又拿了十四五個家人還想</p> <p>25b2 使用打探那汪知縣</p> <p>26b6 你快快請詳要殺便殺要剮便剮決不受答杖之辱</p> <p>26b10 兩個家人扶著呼天大笑走出儀門這邊朋友輩上前迎問道</p> <p>27a3 眾友驚駭道有此等奇冤弟輩已相約</p> <p>27a8 盧椿笑道人生貴適意</p> <p>27a9 就不飲酒正在說話一個獄卒推著背道</p> <p>30a4 遂寫若干書啓</p> <p>30b1 本縣書札比別處更多那汪知縣</p> <p>30b8 教獄卒蔡賢將盧椿投了病狀今夜拿到隱僻之處結果他性命</p> <p>31b2 只見盧椿仰在地上鞭打得偏身青紫手足盡皆綁縛</p> <p>34b6 盧才料不能脫不打自招</p> <p>34b8-35a3 (一字下げ) 話分兩頭却說汪公開得陸公釋了盧椿心中不忿又托心腹連按院劾一本本按院也將汪公為縣令時挾怨誣人始末細細詳辨一本倒下聖旨將汪公罷官回去按院照舊供職陸公安然無恙那時譚遵已省祭在家專一挑寫詞狀陸公廉訪得實參了上司拿下獄中間邊遠充軍盧椿從此自謂餘生絕意仕進益放于詩酒家事漸漸淪落絕不為意</p> <p>37a3 再說陸公在任分文不要愛民如子況又發奸摘隱剔清口(利)弊奸充攝伏盜賊屏跡合縣遂有神明之稱聲名振於都下只因不附權要止遷南京禮部主事離任之日士民攀轅臥轍泣聲盈道送至百里之外那盧椿直送五百餘里兩下依依不舍歎歎而別後來陸公累官至南京吏部尚書</p> <p>37a9 盧椿家已赤貧乃南遊白下依陸公為主陸公待為上賓每日供其酒資一千縱其遊玩山水所到之處必有題咏都中傳誦</p> <p>37b1 一日遊采石李學士祠遇一赤脚道人風致飄然盧椿邀之同飲道人亦出葫蘆中玉液以酌盧椿精飲之甘美異常問道此酒出于何處道人答道此酒乃貧道所自造也貧道結菴於廬山五老峯下居士若能同遊當恣君斟酌耳盧椿道既有美醞何憚相從即刻于</p> <p>37b9 屢遣人于廬山</p>	由	<p>28b9 盧椿全不在意反攔住道由他自搶我們且喫酒菓(莫)要敗興快斟熱酒來家人跌足道相公外邊恁般慌亂如何還要飲酒說聲未了</p> <p>29b6 我有何事這等無禮偏不去…家人共拿了十四五個眾人還想</p> <p>29b3 使用打探不在話下且說汪知縣</p> <p>30b7 却要用刑任憑要我認那一等罪無不如命不消責罰</p> <p>31a1 兩個家人扶著一路大哄走出儀門這幾個朋友上前相迎家人們還恐怕來拿遠遠而立不敢近身眾友問道</p> <p>31a5 眾友驚駭道不信有此等奇冤內中一友道不待察待小弟回去與家父說了</p> <p>31b1 盧椿笑道人生貴在適意</p> <p>31b2 就不飲酒了這是一刻也少不得的正在那里說話一個獄卒推著背道</p> <p>34a7 遂寫起若干書啓</p> <p>34b4 不在話下却說汪知縣</p> <p>35a1 教獄卒蔡賢拿盧椿到隱僻之處偏身鞭打勾死推倒在地縛了手足把个土囊壓住口鼻那消一個時辰嗚呼哀哉</p> <p>35b6 只見盧椿仰在地上手足盡皆綁縛</p> <p>38b10 將嚴刑究訊</p> <p>39a2-7 (二字下げ) 話分兩頭却說汪公開得陸公釋了盧椿心中不忿又托心腹連按院劾一本本按院也將汪公為縣令時挾怨誣人始末細細詳辨一本倒下聖旨將汪公罷官回去按院照舊供職陸公安然無恙那時譚遵已省祭在家專一挑寫詞狀陸公廉訪得實參了上司拿下獄中間邊遠充軍盧椿從此自謂餘生絕意仕進益放於詩酒家事漸漸淪落絕不為意(衍慶堂本)</p> <p>再說陸公在任分文不要愛民如子況又發奸摘隱剔清口弊奸充攝伏盜賊屏跡合縣遂有神明之稱聲名振于都下只因不附權要止遷南京禮部主事離任之日士民攀轅臥轍泣聲盈道送至百里之外那盧椿直送五百餘里兩下依依不舍歎歎而別後來陸公累官遷至南京吏部尚書(衍慶堂本)</p> <p>盧椿家已赤貧乃南遊白下依陸公口主陸公待為上賓每日供其酒資一千縱其遊玩山水所到之處必有題咏都中傳誦(衍慶堂本)</p> <p>一日遊采石李學士祠遇一赤脚道人風致飄然盧椿邀之同飲道人亦出葫蘆中玉液以酌盧椿精飲之甘美異常問道此酒出于何處道人答道此酒乃貧道所自造也貧道結菴於廬山五老峯下居士若能同遊當日斟酌耳盧椿道既有美醞何憚相從即刻到(衍慶堂本)</p>
16	李汧公	<p>2a5 貝氏搖手道老大年紀尚如此嘴臉那得你發積除非天上弔下來還是去那里打劫不成你的甜話兒哄得我多年了</p> <p>3a4 一頭想一頭看</p> <p>4b8 房德暗訝道</p> <p>8a2-4 一字さげ</p> <p>9a8-10 一字さげ</p> <p>9b6 十來個強盜並五六個戳傷莊客</p> <p>10a5 彼此輩以計誘去</p> <p>10b9 教與他做盤費</p> <p>11b10 遇著個故友</p> <p>14a2 却有奇怪面龐酷似前年釋放的強犯房德忙報道相公那縣令面龐與前年釋放的房德一般無二李勉也覺縣令有些面善及聞此言忽然省悟道正個像他心中頗喜道我說那人是個未遇時的豪傑又恐不是若果是此人只道曉得他在此做官來與他索報了莫問罷</p> <p>14a7 李勉還禮道本不知足下在此又恐妨足下政事</p> <p>14b3</p>	30	<p>2a5 貝氏搖手道你的甜話兒哄得我多年了</p> <p>3a2 一頭想一頭看 衍字</p> <p>4b7 房德聞言道</p> <p>8a1-3 二字さげ</p> <p>9a6-8 二字さげ</p> <p>9b4 十來個強盜五六個戳傷莊客</p> <p>10a3 彼此輩以計誘</p> <p>10b6 教他遞與贈為盤費</p> <p>11b8 遇著个故友</p> <p>13b10 仔細認時不是別个便是昔年釋放的房德乃道相公不消避得這縣令就是房德李勉聞言心中甚喜道我說那人是個未遇時的豪傑</p> <p>14a4 又想到我若問時此人只道曉得他在此做官來與索報了莫問罷</p> <p>14a9 李勉還禮道恐妨足下政事</p>

15a10	几榻整齊器皿潔淨架上圖書庭中花卉鋪設得十分清雅乃是縣令休沐之所所以	15a7	正中掛一幅名人山水供一個古銅香爐內香烟靄郁左邊設一張湘妃竹榻右邊架上堆滿若干圖書沿窓一隻几上擺列文房四寶庭中種植許多花木鋪設得十分清雅這所在乃是縣令休沐之處故爾
17a1	亦儘可做得房德謝道	16b10	亦儘可做得過房德謝道
17a4	請李勉至後堂	17a3	(請李勉至)後堂
18b8-9	三字さげ三字間隔	18b7-8	二字さげ二字間隔
19a4	因要探問口氣	19a3	因要探口氣
24a1	倘被他遍河北一傳	23b10	倘被遍河北一傳
24b6-7	三字さげ三字間隔	24b5-6	二字さげ二字間隔
25a6	此等殘惡之人	25a5	此等殘薄之人
25b8	禁不住的寒顫急急為禮稱謝道	25b7	把不住的寒顫向着路信倒身下拜道
26a6	只是王太和兩個人同去買麻鞋了却怎麼好	265	遂叫王太一連十數聲再沒一人答應跌足叫苦道他們都往那里去了
26b3	又喫一驚半句話又應答不出棄下行李光身子同著路信踉踉跄跄的走出書院衙役見了李勉	26b3	又喫一驚半句話也應答不出棄下行李光身子同著路信踉踉跄跄搶出書院做公的見了李勉
26b6	天幸恰有承值令尉出入的三騎馬繫在東廊下路信心生一計對馬夫道	26b5	見有三騎馬繫着是侯縣令主簿縣尉出入的路信心生一計對馬夫道
26b7	快牽過官馬來與李相公乘坐往西門拜客馬夫見是縣主貴賓衙內大尉怎敢不依二人方纔上馬王太撞至面前	26b10	李相公要往西門拜客快帶馬來那馬夫曉得李勉是縣主貴客且又縣主管家分付怎敢不依連忙牽過兩騎李勉剛剛上馬王太撞至馬前
26b10	路信連忙道王大叔來得好快隨相公拜客又叫馬夫帶那騎馬與他騎坐齊出縣門馬夫緊隨馬後路信再給馬夫道相公因李相公明早要起身往府中去今晚著你們洗刷李相公的馬匹少停便來呼喚不必跟隨馬夫聽信便立住了脚道多謝大叔指教	26b10	手中提着一雙麻鞋問道相公往何處去路信接口道相公要往西門拜客你們通到那里去了王太道因麻鞋鞋了上街去買相公拜那個客路信道你跟我來罷了問怎的又叫馬夫帶那騎馬與他乘坐齊出縣門馬夫在後跟隨路信分付道頃刻就來不消你隨了那馬夫真個住下
27a5	三人離縣過橋(×)西兩個從人提了麻鞋從東趕來問道相公那里去王太道連我也不曉得李勉便喝道快跟我走不必多言李勉路信加鞭策馬王太見家主恁般慌促正不知要往那里拜客心中疑惑也拍馬趕上兩個家人也放開脚步捨命奔走	27a10	離了縣中李勉加上一鞭那馬如飛而走王太見家主恁般慌促正不知要拜甚客行不上一箭之地兩個家人也各提著麻鞋而來望見家主便閃在半邊問道相公往那里去李勉道你真莫問快跟來便了話還未了那馬已跑向前去二人負命的趕如何跟得上
27a9	看看來到西門遠遠望見三頭騎口魚貫進城路信遙望認得是本衙幹辦陳顏同著一個令史那一人却不識認陳顏和令史見了李勉滾鞍下馬聲喏常言道人極計生路信便叫道李相公管家們還少生口何不借陳幹辦的暫(×)用李勉意會遂收韁勒馬道如此甚好路信向陳顏道李相公要去拜客暫借你的生口與管家一乘少頃便來	27a10	看行近西門早有兩人騎着生口從一條巷中橫沖出來路信舉目觀看不是別人却是幹辦陳顏同著一個令史二人見了李勉滾鞍下馬聲喏路信見景生情急叫道李相公管家們還少生口何不借陳幹辦的暫用李勉暗地意會遂收韁勒馬道如此甚好路信向陳顏道李相公要去拜客暫借你的生口與管家一乘少頃便來
27b6	二人巴不得	27b7	二人巴不能
28a1	翻盞撒斂相似循著大道望常山一路飛馬而行(去)	28a1	如撒斂相似循著大道望常山一路飛本去了
28a5	又遍室尋覓沒個影兒想道一定兩日久坐在此	28a5	只道在花木中行走又遍尋一過也沒個影兒想道是了一定兩日久坐在此
28a8	又坐了老大一回	28a9	又坐了一大回
29a8	每日出外酣醉而歸	29a9	每日出去喫得爛醉方歸
29b1	小人私問那從者	29b1	小人私下問那從者
29b2	能飛劍取人之頭又能飛行	29b2	能飛劍取人之頭口又能飛行
29b4	上代人	29b4	(上代人)
29b6	便可了事貝氏在屏後聽得便道	29b6	便可了事可不好麼房德道此計雖好只恐他不肯陳顏道他見相公是一縣之主屈已相求定不推託還怕連禮物也未必肯受哩貝氏在屏後聽得便道
29b10	元來却是一條冷巷東鄰西舍不上四五家甚是寂靜	30a3	元來却住在一條冷巷中不上四五家鄰舍好不寂靜
30a2	點起燈火窺探那人等了一回只見那人又是酣醉回來陳顏報知房德陳顏道	30a5	點起燈火回壁縫中張看那人還未曾回走出門口觀望等了一回只見那人又是爛醉東倒西歪的撞入屋裡去了陳顏奔入報知房德起身就走陳顏道
30a6	本縣知縣相公虔誠拜訪義士那人道	30b1	本縣知縣相公在此拜訪義士那人帶醉說
30a10	那人道有甚話說且到裏面來	30b4	那人道既如此到裏面來
30b1	乃是小小客座房德即倒身下拜道	30b6	乃是小小客座點將燈燭焚燒房德即倒身下拜道
30b3	那人扶住道足下乃一縣之主	30b8	那人將手扶住道足下一縣之主
31a1	又賜厚禮	31a5	且又賜恁般厚禮
31a5	賽過蕭政荆卿	31a10	有蕭政荆卿之技
31b3	那人瞧了這個光景認做真情	31b8	那人冷眼瞧了這個光景只是真情
32b3	且說	32b9	話分兩頭且說
32b10	那時走得人困馬乏路信道	33a5	那時走得口中又喝腹內又餓馬也漸漸行走不動路信道



大塚「抱養老人と三言二拍の原原本について」

		<p>1a8 有一人 1b3 起心要去偷些來用 1b4 偷了五六十兩財物 12b10 有一篇正口(宮)調滾繡球為証 板木缺損 13a2-7 沒有錢在身邊 一字さげ 13b8 周秀才道(才問) 板木缺損 21a1 劉元普雙生貴子</p>			<p>1a8 有一箇人 1b3 起心要去偷些來用 1b5 偷了他五六十兩銀子去 13a1 有一篇正宮調滾繡球為証 13a3-9 沒錢在身邊 二字さげ 13b10 周秀才道 21a3 劉元普雙生貴子</p>
18	劉元普 插圖柱題做二十卷,本文33ab缺	<p>1a2 劉元普雙生貴子 1a3-4 無 1a5 為此常言說道 1b3 若說那身在青雲之上拔人淤泥之中 2a8 老實勤謹的女娘 2a10 無心人對着有心人 2b7 始終有些正氣獨有最狠毒最狡猾最短見的是那晚老婆 3a3 那娶晚老婆的 3a7 也只得依順 6a8-6b1 行二句句間隔三字 7a7-7b2 二字さげ句間二字下同 9b3 想了一回 11b2 齋手書 11b9 元音收過書 12a2 即請出王夫人來 12a10 又一面打發人往錢塘扶柩 13a3 領與夫人觀看沒一個中意 13a6 密托與他央薛婆同去尋覓 13a7 不在話下且說 15b3 鬆放囚囚 18a10 澆奠一番 18b3 見任(在)任西川節度使 誤刻 21b1 撥一個養娘服侍 23a1 地理先生 35a2 太(夫)人魏氏 誤刻 38a1 無</p>	20	<p>1a2 李克讓竟達空函 劉元普雙生貴子 1a3-4 詩曰 1a5 為此達者便說 1b3 況有那身在青雲之上拔人于淤泥之中 2a8 老實勤謹的 2a10 無心人對着有心人 2b7 始終有些正氣自不甘學那小家腔派獨有最狠毒最狡猾最短見的那晚婆 3a3 那娶晚婆的 3a7 也只得依順他 6a8-10 行三句句間隔一字 7a6-7b1 三字さげ句間一字下同 9b2 疾忙 11b1 齋了手書 11b8 元音收過了書 12a1 便叫請出王夫人來 12a9 又一面打發人往錢塘去扶柩了 13a2 領來看了沒一個中夫人的意 13a5 密托了他央薛婆與他同去尋覓 13a6 就此起程不題如今再表一段緣因話說 15b3 鬆放了囚囚 18a10 澆奠了一番 18b3 見任西川節度使 21b1 撥一個養娘服侍他 23a1 地理師 35a2 夫人魏氏 38a1 這本話文出在空緘記如今依傳編成演義一回所以奉勸世人為善</p>	
29	懷私怨	<p>1a2 懷私怨狠僕告主 無 1a3-4 二字さげ句間二字下同 1b2-3 大抵為人最不可使性 8b2 話休煩絮且說 8b6 如今屍骸尚存(在)船中 9b10 夫妻鍾愛 12b2 束手待斃忽有人傳說本縣有個小兒科姓徐有起死回生手段王生便與劉氏商議 12b3 次日王生整備了午飯 12b7 這般不湊巧直到數日之後奴伴中說出實話來 13a7 攜此大難望爺臺照察 14b8 用甘言美語哄他到此 21b5 劉氏別了王生出縣回家款待呂大是不必說次日午前便同呂大到縣裏來俟俟知縣升了堂</p>	11	<p>1a2 惡船家計賺假屍銀 狠僕人誤投真命狀 1a3-4 詩曰 1b2-3 原來人生最不可使性 三字さげ句間一字下同 8b2 這是後話却說 8b6 如今屍骸尚在船中 9b10 夫妻歡愛 12b2 一日有個親眷辦着盒禮來望痘客王生接見茶罷訴說患病的十分沉重不久當危那親眷道本縣有個小兒科姓馮真有起死回生手段離此有三十里路何不接他來看親看親王生道領命當時天色已黑就留親眷喫了晚飯自別去了王生便與劉氏說知次日王生果然整備了午飯 12b10 如今再也不消說了直到數日之後同伴中 13a10 說出實話來 15a1 攜此大難之端望爺臺照察 21b8 用甘言美語哄他到此 22a8 劉氏別了王生出得縣門乘着轎呂大與僕僕隨了一同運到家中劉氏自進房裏教家僮們陪客人喫了晚食自在廳上歇宿次日過午又一同的到縣裏來知縣已升堂了</p>	
30	念親恩	<p>1a2 念親恩孝女藏兒 無 1a3-4 入舍為婿 4b4 却是 5b7 10a10-10b4 一字さげ下同 12b8 招姐 13a5 每年 17a9 實是氣不甘</p>	38	<p>1a2 占家財狠婿妬姪 延親脈孝女藏兒 1a3-4 詩曰 4b4 入舍為婿 5b7 倒是 10a10-10b4 二字さげ下同 12b8 引姐 13a5 年年 17a9 實是氣不甘</p>	
37	崔俊臣	<p>1a2 崔俊臣巧會芙蓉屏 無 1a3-4 你在此少待轎到便來 1b1 就喚一乘轎到舊寓迎接夫人 1b2 打發了轎夫心下好生無主 2a1 及拘鄰舍來問都說見上轎去的 2a4 附郭首縣名西安縣 2a10 一日縣宰 2b1 將拙妻賺去當時告在臨安 2b7 縣宰聞言驚訝道小妾如何却在臨安嫁人 2b8 如何却在臨安嫁人 2b10 被奸人賺來賣了恐怕出丈夫之醜 3a1</p>	27	<p>1a2 顧阿秀喜捨檀那物 崔俊臣巧會芙蓉屏 1a3-4 詩曰 1b1 你在此等等轎到便來就是 1b2 就叫一乘轎到舊寓接夫人 2a1 打發了去心下好生無主 2a4 問他鄰舍多見是上轎去的 2a10 衢州首縣是西安縣附郭的 2b1 縣宰 2b7 騙拙妻錯認是家裡轎上的去了當時告了狀 2b8 縣宰色變了道小弟的小妾如何却在臨安嫁得在此 3a1 被奸人賺來賣了恐怕出丈夫之醜 3a2</p>	

3a4 請先生略移尊步有一人要求相見王教授不知是誰起身隨縣宰直至裡邊

3b2 乃是一所空房先有三兩箇婦女在內

3b3 明日把我賣在官船上那時明知被賺因你是調官的人恐說出真情

3b7 王教授要賠還三十萬身錢縣宰道一時不曾察聽得備細訊以同官之妻為妾十分有罪了若更言及還錢一發置身無地了教授稱謝而歸

4a1 又是往他州外府赴任去的道是再無有相見之日了

4a5 但王夫人所遭不幸失身為妾又不曾根究奸人報仇雪恨尚為美中不足總不如崔俊臣芙蓉屏故事

5a5 那崔俊臣

5a6 擇定吉日打疊行裝赴任

5a7 僱下一隻大船船戶却是蘇州人自稱姓顧船上五六箇(個)後生說都是弟男子姪(侄)講定送至杭州交卸俊臣夫妻二人帶領家奴使婢下得船來趁着順風扯起滿帆繇長江一路進發

5b1 那消幾日已至蘇州地方揀箇熱鬧之處停棹繫纜泊在岸邊船家走向艙門說道告官人知得蘇州是箇(個)大馬頭一來該燒順福二則我們一路辛苦也要些酒錢官人一賞賞賜罷俊臣本是宦家子弟又居了官位做事甚要體面就大大與他一箇賞封船家買起三牲祭獻神道因見官人出手冠冕不好待慢另外又買幾般可口的東西兩瓶三白酒泉安排一卓盛饈送入艙中俊臣就教(叫)煖起酒來夫妻對酌

5b8 那蘇州三白酒酒是馳名天下的纔揭瓶口就有一種香味撲鼻斟向杯中其色淡而有韻猶如月映梅花俊臣道酒味未知如何這顏色先已可愛遂舉杯邀福人齊飲真箇醇濃甘美齒頰流芬連聲稱贊蘇州酒好果不虛傳

6a3 俊臣酒量頗寬王氏止半盞相陪

6a4 方飲到佳處兩瓶酒已將竭急教(叫)家人另去多買幾瓶開懷暢飲一時飲得興高把箱中所帶金銀杯觥之類都取出來明晃晃擺在桌上早被船家在後艙見那船家原是箇不良之人起初看見行囊沉重已先有意了今番又見這些酒器愈加動火便叫弟男子姪(侄)算計停當又走向艙門口說道官人娘子在此鬧處歇船恐怕熱鬧我們移到清涼所在停泊

6b1 此時正是七月天氣炎熱更兼俊臣多飲了幾杯酒甚覺煩燥忽聞此言連稱有理即教(叫)快些行去

6b3 王氏道此處雖熱想是市中料無他處那清涼之處恐晚間不謹慎俊臣道此處是內地不比外江況船家又是本處人必知利害不消多慮那船家討了口氣連忙撐篙搖櫂望曠野之處而去

6b6 那蘇州左近太湖有(右)的是大河大洋官塘大路尚有不測若是小港支河多是賊人家裡俊臣是江北人只曉得揚子江有強盜那知內地賊寇更多船家把船直放到蘆葦中泊定

6b10 大家喫箇半酣捱近黃昏提刀執斧一齊趕奔艙中迎頭先把一箇家人砍倒嚇得俊臣夫妻連忙磕頭討饒道所有東西任憑(意)拿去只求饒命眾船家齊聲道東西也要性命也要二人聞言一發魂不附體只是磕頭

7a4 (求)我全屍而死便是萬代恩德那賊頭道也罷姑饒你一刀說還未絕跨一步上前提着俊臣腰膀向艙門外撲通的撩下水去其餘家童使女盡行殺箇乾淨

3a5 畧請先生移步到裡邊有一箇人要奉見王教授隨了進去

3b1 乃是一个空房有三兩個婦女在內

3b3 明日把我賣在官船上了明知被賺我恐怕你是調官的人說出真情

3b6 王教授要賠還三十萬原身錢縣宰道以同官之妻為妾不曾察聽得備細恕不罪責勾了還敢說原錢耶教授稱謝而歸

4a1 又是到任去的他州外府道是再無有撞着的事了

4a4 這美中不足處那王夫人雖是所遭不幸却與人為妾已失了身又不曾查得奸人跟脚出報得冤仇不如崔俊臣芙蓉屏故事

5a5 是年辛卯俊臣

5a6 同妻赴任

5a7 有一隻蘇州大船慣走杭州路的船家姓顧實定了下了行李帶了家奴使婢繇長江一路進發包送到杭州交卸

5a9 行到蘇州地方船家道告官人得知來此已是家門首了求官人賞賜些并買些福物紙錢賽賽江湖之神俊臣依言拿出些錢鈔教如法置辦完事畢船家送一桌牲酒到艙裡來俊臣叫家童接了擺在桌上

5b3 同王氏煖酒少酌

5b3 俊臣是宦家子弟不曉得江湖上的禁忌

5b4 喫酒高興把箱中帶來的金銀杯觥之類拿出與王氏歡酌却被船家後艙頭張了起不良之心

5b6 此時是七月天氣船家口官艙裡道官人娘子在此鬧處歇船恐怕熱鬧我們移船到清涼些的所在泊去何如俊臣對王氏道我們船中悶燥得不耐煩如此最好

5b9 王氏道不知晚間謹慎否俊臣道此處須是內地不比外江況船家是本間人必知利害何妨得呢就依船家之言憑他移船

6a2 那蘇州左近太湖有的是大河大洋官塘路上還有不測若是傍港中去多是賊的家裡俊臣是江北人只曉得揚子江有強盜道是內地港道小了境界不同豈知這些就裡是夜船家直把船放到蘆葦之中泊定了

6a6 黃昏左側捱了刀竟透艙裡來先把你一個家人殺了俊臣夫妻不是頭磕頭討饒是有的東西都拿了去只求饒命船家道東西也要命也要兩個只是磕頭

6a9 船家把刀指着王氏道你不必慌我不殺你其餘都饒不得俊臣自知不免再三哀求道可憐我是个書生只教我全屍而死罷船家道這等饒你一刀快跳在水中去也不等俊臣從容提着腰膀撲通的撩下水去其餘家童使女盡行殺盡

	<p>單單只留着王氏放聲大哭搶去輪門投水賊人攔住不容我已饒你為何反生短見王氏那裏聽他愈加悲泣那賊首道娘子莫哭我實對你說我第二箇兒子未曾娶得媳婦今往徽州齊雲巖進香去了不過幾時(日)便歸就與你成親你是我一家人了安心住着自有好處</p>		<p>只留着王氏一個對王氏道你曉得免死的緣故麼我第二個兒子未曾娶得媳婦今替人撐船到杭州去了再是一兩個月纔得歸來就與你成親你是我一家人了你只安心住着自有好處不要驚怕</p>
7a9	<p>王氏起初怕他來相逼已奔一死聽見說了這些話心中暗想道我若死了誰人報這冤讎權且忍耐偷生看有機會再作道理</p>	6b4	<p>一頭說一頭就把船中所有盡檢點收拾過了王氏起初怕他來相逼已奔一死聽見他說了這些話心中畧放寬些道且到日後再處</p>
7b4	<p>理定了主意遂住了啼哭說道你若果然饒我的性命情願做你的媳婦船家道我是老實人那有假話你若不信我罰箇誓何如王氏道公公既是真心何消罰誓只道公公兩字哄得那賊首滿心歡喜道好好這纔是箇自家人眾賊一齊動手把</p>	6b8	<p>果然此後船家只叫王氏做媳婦王氏假意也就應承凡是船家教他做些甚麼他千依百順替他收拾零碎料理事務真像個掌家的媳婦伏侍公公一般無不任在身上是件停當船家道是尋得個好媳婦真心相待看看熱分並不提防他有外心</p>
7b10	<p>船中所有的東西盡數收拾把船移歸自己村中泊歇</p>	6b10	<p>如此一月有餘乃是八月十五日中秋節令船家會聚了合船親屬水手人等叫王氏治辦酒肴</p>
8a3	<p>自此那賊頭只叫王氏做媳婦王氏將機就機也就假意應承在船上千依百順替他收拾零碎料理事務體真像箇(個)掌家的媳婦伏侍公公一般諸色停當那老賊道是尋得箇好媳婦真心相待看看熱分並不提防他有外心</p>	6b10	<p>如此一月有餘乃是八月十五日中秋節令船家會聚了合船親屬水手人等叫王氏治辦酒肴</p>
8a7	<p>如此月餘乃是八月十五日中秋節老賊會聚了合船親屬教(叫)王氏治辦酒筵</p>	7a5	<p>船家也在船裡宿了王氏自在船尾聽得鼾睡之聲徹耳於時月光明亮如晝仔細看看船裡沒有一箇不睡沉了</p>
8a10	<p>王氏自在船尾聽鼾之聲徹耳其時月光明如晝仔細看看那船中沒一箇不是爛醉如泥</p>	7a8	<p>王氏輕身跳了起來趁着月色一氣走了二三里路走到一個去處</p>
8b3	<p>王氏輕身跳起趁着月色一氣走了二三里路走到一箇去處</p>	7b2	<p>艸深泥滑</p>
8b6	<p>艸深泥滑</p>	7b5	<p>漸漸東方亮了畧畧膽大了些遙望林木之中有屋宇露出來王氏道好了有人家了急急走去到得前面抬頭一看却是一個庵院的模樣門還關着</p>
8b8	<p>漸漸東方發白遙望林木之中露出屋宇王氏道謝天已有人家了急急走上前去抬頭一看却是一個庵院門還關着</p>	7b7	<p>王氏欲待叩門心裡想道這裡頭一萬一敲開門來是男僧撞着不學好的非禮犯犯不是纔脫天羅又羅地網</p>
8b10	<p>欲待叩門心裏想道這裏頭一萬一是男僧撞着不學好的非禮犯犯可不纔脫天羅又羅地網</p>	7b10	<p>須不怕他只在門首少坐坐等他開出來的是</p>
9a4	<p>也不怕他了且在門首少坐等待開門出</p>	8a4	<p>須與間只聽得裡頭托的門控響處開將出來乃是一個女僮元來是個尼庵一徑的走將進去院主出來相見</p>
9a5	<p>須與間只聽得裏邊托的門控響處開(有人)將出來却是一個女僮元來是箇尼庵一徑走將進去請院主出來相見</p>	8a5	<p>問道清早到小院問王氏對鶯生人未知好歹不敢把真話說出來哄他道妾是真州人乃是永嘉縣尉次妻</p>
9a8	<p>將真話(言)說出假言道妾乃永嘉縣尉次妻家本真州只因</p>	8a7	<p>叫妾取金杯飲酒不料偶然失手落在河裡去了料無活理</p>
9b1	<p>教(叫)妾取金杯飲酒不料(期)偶然失手墜落河(水)中必無活理</p>	8b1	<p>何處安頓是好</p>
9b5	<p>何處安頓</p>	8b5	<p>有心要留他做箇(個)徒弟</p>
9b7	<p>有心要留他做箇(個)徒弟</p>	8b7	<p>若是師父有甚高見院主道小院僻在荒濱最幽靜幸得一二同伴都年</p>
9b8	<p>若是師父有甚高見院主道小院僻在荒濱最幽靜幸得一二同伴都年(有)五十以上侍者幾人又皆淳謹老身在此住跡</p>	8b8	<p>披削髮</p>
10a3	<p>削髮披緇</p>	9a3	<p>豈不強似做人婢妾受今世的苦惱結來世的冤家麼王氏聽罷</p>
10a4	<p>豈不強似做人婢妾受今世的苦惱結來世的冤家麼王氏聽罷</p>	9a4	<p>便是妾身的有結果了還要怎的就請師父替弟子落了髮不必遲疑果然院主裝起香敲起磬來拜了佛就替他落了髮</p>
10a6	<p>妾身便有結果了敢不奉命就請師父與弟子披髮則院主見他情願出家好生歡喜即請出院中兩箇同伴相見院主就裝香擊磬拜了佛替他落髮</p>	9a6	<p>院主與他落了髮起箇法名喚做慧圓參拜了三寶就拜院主為師與同伴也重新見禮畢從此晨鐘暮鼓禮佛燒香誦習經典</p>
10b1	<p>院主與他落了髮起箇法名喚做慧圓參拜了三寶就拜院主為師與同伴也重新見禮畢從此晨鐘暮鼓禮佛燒香誦習經典</p>	9b1	<p>落髮後院主起箇法名叫做慧圓參拜了三寶就拜院主做了師父與同伴都相見已畢從此在尼院中住下了</p>
10b3	<p>他本是大家出身天性聰明一月之內把經典一一歷過盡皆通曉院主深相敬重凡事俱來請問且又寬和柔善院中沒一箇(個)不與他相好每日清晨在白衣大士前禮拜百遍略不間斷拜完只在自己室中靜坐因怕貌美惹出事來所以不輕易露形外人也難得見面</p>	9b3	<p>乃是院主認識的近代施主留他喫了些齋道兩箇人是偶然閑步到身邊不曾帶得甚麼東西來回答</p>
10b10	<p>院主認得是近代施主留住喫(吃)齋這二人原是偶然閑步到此身邊不曾帶得甚麼東西來回答</p>	10a1	<p>乃是院主認識的近代施主留他喫了些齋道兩箇人是偶然閑步到身邊不曾帶得甚麼東西來回答</p>

11a3 以答昨日之齋院主受了就把來裱在一格素屏之上王氏見了墓(墓)然喫驚仔細認了一認

11a4 這幅畫是何處來的

11a6 他兩個(箇)原是箇(箇)船戶

11a8 近年忽然家事驟發…以致富足也未知真假王氏道可常到院中來慶院主道偶然至此也不常到王氏問了明白記着

11b1 寫一首臨江仙詞

11b6 無

11b7 文義原不十分精通

11b8 那曉得中間緣故誰知這畫却是崔縣尉的手筆也是船內被劫之物…心中暗暗傷悲

12a1 但恨是箇女身又做了尼僧

12a2 再看幾(幾)會却是冤讎當雪 誤刻

12a3 那姑蘇城裏有一人姓郭名慶春

12a5 一日遊(遊)到院中

12a6 心中愛了問院主要買

12a8 中含冤仇意思倘遇着有心人玩味詞句…未必不查出賊人踪跡…因此就教(叫)師父賣與郭慶春買了這畫

12b1 其時有箇御史大夫姓高名納麟…最喜歡的是書畫郭慶春因要奉承此人故此願出價錢買這幅紙屏去奉獻

12b4 忙忙然也未曾看着題詞

12b6 待我慢慢觀玩又一日只見門首一人手拿着草書四幅

12b8 就不肯放過了

12b8 高公接在手

13a8 伏在水底多時

13a9 身畔(邊)並無一錢糧(幸)得這家主人良善將乾衣易換款待酒飯

13b1 說道既遭盜劫…不敢相留英問路進城陳告在平江路案下

13b7 又見(兼)字法精好…乃道

14a2 俊臣一眼睜着面色俱變泫然垂淚

14a5 只不知何處所得

14a7 此詞又是英妻王氏所作

14b2 喚出兩箇孫兒拜了先生就留在(×)書房中住下

14b4 請郭慶春來問道

14b7 這芙蓉屏是甚處得來何人題詠的王氏見來人問得蹊蹺就叫院主雙(細)問道來問的是何處人

14b10 王氏曉得…教(叫)院主把真話答他道…就是院中小尼慧圓所題

15a7 願禮請拜為師父供養在府不可推却院主遲疑道院中事體大小都要他主張却如何去得王氏聞得高府中來接心中

15b3 萬一推託惹出事端怎生當抵院主見說得有理只得依從

15b4 當下王氏上了轎一直的抬到高府高公且未與他相見竟引去入內室去見夫人就教(叫)夫人留他房中寢宿高公自到別房去了

15b8 不是本處人…王氏聽罷淚如雨下答道夫人…不是本處原是真州人丈夫乃…一向不敢把實話對人說今在夫人面前前日忽有人拿一幅畫芙蓉施於院中小尼看來却是丈夫船中所失之物

16a7 口中便說即向着夫人下拜道

16b4 望夫人轉告相公替小尼查訪若是獲(查)得強人伸雪冤仇

16b5 既有這些影跡不難查訪

16b7 高公說知又道這女娘

16b9 且莫說破那崔俊臣也屢催高公替他體訪

17a3 願阿秀兄弟居住所在

17a5 不知丈夫在不在

17a10 或者肯依也未可知若畢竟不肯

17b2 回報了高公

10a4 以答謝昨日之齋院主受了便把來裱在一格素屏上面王氏見了仔細認了一認

10a6 此幅畫是那裏來的

10a7 這幅畫是何姓名…做甚麼生理的院主道

10a9 他兩個原是箇船戶

10a9 近年忽然家事從容了…以致如此未知真否如何王氏道長到這裏來的慶院主道偶然來來也不長到王氏問得明白記了

10b3 寫一首詞

10b7 右調臨江仙詞

10b8 文義不十分精通

10b9 不曉得中間緣故誰知這畫來歷却是崔縣尉自己手筆畫的也是船中劫去之物…心內暗暗傷悲

11a2 只可惜是個女身又已做了出家人

11a3 再看機會却是怨仇當雪

11a4 姑蘇城裡有一個人名喚郭慶春

11a6 一日游到院中來

11a8 心裡喜歡不勝問院主要買

11a10 中含冤仇意思在袖內遇着有心人玩着詞句…未必不查出踪跡來…就叫師父賣與他罷慶春買得

11b3 其時有個御史大夫高公名納麟…最喜歡書畫郭慶春想要奉承他故此出價錢買了這幅紙屏去獻與他

11b5 忙忙里也未看着題詞

11b7 送慶春出門來別了只見外面一個人手裡拿着草書四幅

11b9 就不肯便放過了

11b10 高公接上手

12a9 伏在水底多時

12a10 並無一錢在身賴得這家主人良善將乾衣出來換了待了酒飯

12b2 打發道既遭盜劫…不敢奉留英便問路進城陳告在平江路案下了

12b8 又見他字法精好…對他道

13a4 俊臣一眼睜去見了不覺泫然垂淚 誤刻

13a6 只不知何得在此

13a8 此詞又是英妻王氏所作

13b3 叫兩個孫子出來拜了先生就留在書房中住下了

13b6 請將郭慶春來問道

13b8 這芙蓉屏是那裏來的又是那個題詠的王氏見來問得蹊蹺就叫院主轉問道來問的是何處人

14a2 王氏曉得是…院院主把真話答他道…就是院中小尼慧圓題的

14a9 願禮請拜為師父供養在府中不可推却院主遲疑道院中事務大小都要他主張如何接去得王氏聞得高府中接他心中萬一推託了惹出事端來怎生當抵院主曉得王氏是有見識的不敢違他但只是道去便去只不知幾時可來院中有事怎麼處王氏道等見夫人過住了幾日齋院空便可以來得就來想院中也沒甚事倘有疑難的高府在城不遠可以來問信商量的院主道既如此只索就去當直的叫轎夫打轎進院

14b10 王氏上了轎一直的抬到高府中來高公未與他相見只叫他到夫人處見了就叫夫人留他在臥房中同寢高公自到別房宿歇

15a5 不是這裡本處人…王氏聽罷淚如雨下道覆夫人…不是此間是真州人丈夫是…一向不敢把實話對人說而今在夫人面前前日忽然有個人拿一幅畫芙蓉到院中來施却是丈夫船中之物

15b4 有此冤情在內即拜夫人一拜道

16a1 只求夫人轉告相公替小尼一查若是得了罪人雪了冤仇

16a2 既有了這些影跡事不難查

16a4 高公說了又道這人且是

16a6 且不要說破高公出來見崔俊臣時俊臣也屢催高公替他查查

16a10 願阿秀兄弟居住所在

16b3 不知道丈夫還在

16b8 或者肯依固好畢竟不肯時節

16b9 一一回報了高公



	<p>18b4 丈夫從小會泗水是夜眼見得囫圇拋在水中或者天幸留得姓(性)命</p> <p>18b6 權扮做道姑模樣又過了半年朝廷差進士薛淳化</p> <p>18b8 吏才精敏大有風力</p> <p>19a2 醒來不見王氏</p> <p>19a7 謹(歡)呼飲酒…將住居圍住</p> <p>19a9 第一名強盜</p> <p>19b4 那御史</p> <p>20b1 可以根尋踪跡</p> <p>20b3 妻子既不能見…請高公出來拜謝了就把要去赴任的意思說出</p> <p>20b8 然據着芙蓉屏上題詞</p> <p>20b10 到任不得</p> <p>21a1 他若聞得必能自出</p> <p>21a4 曉得別無異心</p> <p>21b4 方與王氏說出</p> <p>21b9 驚得如醉如夢那高公指着王氏對俊臣笑道</p> <p>22a1 崔縣尉此時也無暇回答</p> <p>22a3 多不解其故</p> <p>22b5 各有半年有餘只道失散各方竟不知同居一處老夫一向隱忍不通兩人知道</p> <p>23a7 又贈好些盤費當日就道(連)崔縣尉夫妻</p> <p>23b4 及至任滿後回來</p> <p>23b7 徑至墓前拜奠</p> <p>23b9 自家也在內</p> <p>23b10 崔俊臣出宦賞厚贈院主</p> <p>24a2 留在院主處為香燭之費</p> <p>24a3 自此立心長齋</p> <p>24a4 回到真州故土親族俱來相會說出這段緣故無不嗟嘆稱揚高公之德那崔俊臣也不想更去補官只在家中逍遙受用夫妻白頭到老有詩為證(証)</p>	<p>18a1 丈夫從小會沒水是夜眼見得囫圇拋在水中的或者天幸留得性命</p> <p>18a4 權扮做道姑模樣又過了半年朝廷差個進士薛淳化</p> <p>18a6 他吏才精敏是有手段的</p> <p>18a10 醒來不見了王氏</p> <p>18b5 謹呼飲酒間…將宅居圍住</p> <p>18b7 頭一名強盜</p> <p>19a2 薛御史</p> <p>19b10 可以根尋得出來的</p> <p>20a2 妻子既不見…請高公出來拜謝了他就把要去赴任的意思說了</p> <p>20a7 然據着芙蓉屏上尚及題詞</p> <p>20a9 到任不得了</p> <p>20a10 他聞得了必能自出</p> <p>20b4 曉得他別無異心</p> <p>21a4 把</p> <p>21a8 驚得如醉醒夢裡高公笑道</p> <p>21a10 儘有不曉得詳悉的</p> <p>21b1 各有半年多只道失散在那里竟不知同居一處多時了老夫一向隱忍不通他兩人知道</p> <p>22a3 道</p> <p>22b6 又贈好些盤纏當日就道他夫妻兩個</p> <p>23a3 在永嘉任滿回來</p> <p>23a6 問到他墓下拜奠了</p> <p>23a8 自家也在裡頭</p> <p>23a9 崔俊臣出宦賞厚贈了院主</p> <p>23b1 留在院主處為燒香點燭之費</p> <p>立心自此長齋</p> <p>自到真州寧家另日赴京補官這是後事不必再題此本語文高公之德崔尉之誼王氏之節皆是難得的事各人存了好心所以天意周全好人相逢畢竟冤仇盡報夫婦重完此可為世人之勸 詩云</p>
<p>39 誇妙術</p>	<p>1a2 誇妙術丹客提金</p> <p>1a3-4 飄然而去所以唐解元有這首詩</p> <p>1b9 零星星星也弄去了…受過了好些丹客的哄騙</p> <p>3a1 畢竟有一日成功</p> <p>3a4 請次日湖中飲酒到明日殷殷勤勤接到船上</p> <p>6a7 富翁一心已在爐火游興盡闌</p> <p>6b8-9 所恨無人可通音問</p> <p>7a8 移船到莊</p> <p>7b7 富翁就着人接那小娘子起來那小娘子鬚妝喬扮帶着兩個丫頭</p> <p>任憑尊嫂揀擇人少時學生再喚幾個婦女來伏侍丹客就同那小娘子去看內房</p> <p>8a5 富翁急急還(來到)家中取了一對金釵一雙金鐲</p> <p>9a1 方纔心滿意足</p> <p>9a7 今日且在舍下料理明日學生就搬過來一同做事是晚就具酌在園亭上款待</p> <p>10a9 家裡老奶奶去世</p> <p>16(11)a5 肯留妾看爐心裡恨不得許下半邊天來</p> <p>16(11)a9 囑托與他叮嚀道</p> <p>16(11)b-15b4 即進內房來</p> <p>16a9 家僮急忙走去請來</p> <p>16b8 幸喜小娘子即溜側身閃過</p> <p>17a1 就幹出這樣昧心事來…如此無行之人</p> <p>17a4 趕上前便打慌得小娘子三腳(步)兩步(脚)奔進內房又虧兩個丫頭攔住</p> <p>17b9 裝在廂裡叫齊</p> <p>18a4 真個認做污穢觸犯了</p> <p>18a6 不要在丹房裡弄這事</p> <p>已自先把這二千金提去了留着家小使之不疑後來勾搭上場也都是他做成的</p> <p>18b3 計較把這堆狗屎堆在鼻子上</p> <p>料來不過</p> <p>21a2 就拿住師父要送在當官</p> <p>21a8 不好難為得只得放手</p>	<p>18 1a2 丹客半黍九還 富翁千金一笑</p> <p>1a3-4 詩云</p> <p>1b9 飄然而去了所以唐解元有這首詩也</p> <p>3a1 零星星星也弄掉了…受過了好些丹客的騙</p> <p>3a4 畢竟有一日弄成了</p> <p>6a7 請他次日下湖飲酒到了明日殷殷勤勤接到船上</p> <p>6b2 兩人說得好着游興既闌</p> <p>6b8-9 所恨無一人通音問耳</p> <p>7a8 移船到莊邊來</p> <p>7b7 富翁就叫人接了那小娘子起來那小娘子鬚妝了戴着兩個丫頭</p> <p>誤刻憑尊嫂揀個像意的房子住下了人少時學生還再去喚幾個婦女來伏侍丹客就同那小娘子去看內房了富翁急急走到家中取了一對金釵一雙金手鐲</p> <p>9a2 方是心滿意足的事</p> <p>9a7 今日且偏陪在家下料理明日學生搬過來一同做事是晚就具酌在園亭上款待過</p> <p>10a10 家裡老奶奶沒有了</p> <p>11a2 至于茶飯之類自然不敢有缺</p> <p>11a7 肯留妾心裡恨不得許下了半般的天</p> <p>11a10 囑托與他了叮嚀道</p> <p>15b7 他就進內房來</p> <p>16b1 家僮走去請了出來</p> <p>16b10 小娘子閃過了</p> <p>17a3 就幹出這樣昧心的事來…如此無行之人</p> <p>17a6 一趕趕來小娘子慌忙走進內房虧得兩個丫頭攔住</p> <p>17b10 裝在廂裡了叫齊了</p> <p>18a5 真個認做觸犯了他</p> <p>18a7 不要在丹房裡頭弄這事</p> <p>已自先把這二千金提了罐去了留着家小使你个(不)疑後來勾搭上場也都是他教成的計較把這堆狗屎堆在你鼻頭上</p> <p>他不過</p> <p>19b6 就拿住了師父要去送在當官</p> <p>21a3 不好難為得他只得放了</p>

		21b1	好些面善仔細一認却像前日丹客帶來 與他偷情的可意人兒一般無二疑惑道 那冤家緣何在船上			21b3	好些面染仔細一認却是前日丹客所帶來的 妾與他偷情的疑道這人緣何在船上
		21b6	也未可知			21b8	無
		22b1	羞顏難掩			22b2	無
40	還多財	1a2	還錢多白丁橫帶		22	1a2	錢多處白丁橫帶 遲退時刺史當稱
		1a3-4		無		1a3-4	詩云
		1b10	常將冷眼觀螃蟹	二字さげ		1b10	長將冷眼觀螃蟹 三字さげ
		4b5-6, 16a3		二字さげ二字間隔			三字さげ一字間隔
		14a5	隨伏侍			14a5	後
		15a2	把船打得粉碎			15a2	把隻船打得粉碎
		19b9	嘲他這歌名掛枝兒道是				無
		20a3		無		20a3	詞名掛枝兒

今古奇觀・二刻拍案驚奇對照表初稿 ☆紫色字：異體字、□：空白、?：不明、下線字（）：上圖本

今古奇觀	業行	二刻	業行
34	女秀才	17	同窗友認假作真 女秀才移花接木
	1a2	1a2	同窗友認假作真 女秀才移花接木
	1a3	1a3	詩曰
	4b3-10, 5a4	4b4-5a1, 5a4	句間一字下略
	7b10	8a1	去查一查踪跡看三(二)人遂同出城來
	9b5	9b7	他起初因見父親是武出身
	10a1	10a2	這也是蜀中做慣的事遇着提學到來他就 遇着宗師到來他就改名勝傑表字俊卿 報了名改為勝傑說是勝過豪傑男人之意 取勝過豪傑男人之意一般隨行逐隊去 表字俊卿一般的入了隊去考童生一考就 考童生且喜文星照命縣府道高高前列 做了秀才他男扮久了人多認做開參將 的小舍人
	10a5	10a7	歡喜開宴因武官人家秀才乃極難得的
	10a7	10a8	添了箇幫手有好些氣色那內外大小却 像忘記他是女兒一般的凡事盡要蜚娥 支持他同學有兩個好友一箇姓魏名造 字撰之一箇姓杜名億字子中
	10b1	10b3	魏撰之方年十九長俊卿兩歲杜子中與 與俊卿同年只小得兩箇月三人就如親 生弟兄一般極是契厚同在(往)學中一 箇齋舍裡讀書二人無心只認做同窗 (窗)好友開俊卿却有意要在二人之中 揀一箇嫁他將二人比並起來又覺得杜 子中是同庚生
	11a3	11a5	豈不有趣着想着淫昵便把面目放在何處 我輩堂男子誰肯把身子做玩童乎魏兄 該罰東道便好魏撰之道適纔聽得杜子中 愛慕俊卿
	11a8	11a10	誰叫你獨小自然該喫些虧
	11a10	11b2	自家想道
	11b5	11b8	却去住在百來步外一株高樹上對着樓窓 呀呀的叫
	11b7	11b10	叫得可厭且教他喫我一箭則箇隨下樓 到臥房房中
	12a1	12a4	這邊望見中箭急急下樓仍舊改了男粧 往學中看那枝箭的下落
	12a5	12a7	子中拔出箭來道
	12a7	12a9	三字さげ句間三字
	12a8	12a10	魏撰之聽得急出來叫道
	12a10	12b2	魏撰之細看時
	12b9	13a1	俊卿假言道
	13a1	13a3	尚未
	13a1	13a4	與小弟有些□(廝)像
	13a5	13a8	令姊處也仗吾兄幫襯
	13b6	13b8	小弟雖非買大夫之醜若與令姊相並定 是及俊卿含笑而別
	13b9	14a1	並不與杜子中知道因為箭是他拾着的今 怕說明這段緣由起子中爭娶之念故此 半字不題
	14a4	14a6	即是百年姻眷
	14a8	14a10	只道真有箇姊姊俊卿却又錯認魏撰 之乃天定良緣已是心口相許但為杜子 中十分相愛好些拋撇不下
	14b4	14b6	待兄高捷方議此事魏撰之道就遲到今 冬也無妨
	14b7		連忙作揖道多謝吾兄主盟異日當圖厚 報語休煩絮
	14b9	14b9	兩人來拉了俊卿同去
	15a2	15a3	遂托病不行
	15a4	15a5	兩家報捷

15a5 不想…時值軍令考察開下若干款數遞  
箇揭帖到按院處

15b1 兵道行牌到府說是奉旨犯人不宜疏縱  
太守准了訴詞不肯召保俊卿央着同窓

15b4 (窓)兩箇新中學人去見太守太守說  
同心之人(友)

15b9 而今我們匆匆進京心下如割

15b10 做定圈套陷人

16a3 上下分派使用得停當…做一件未結公  
案

16b1 若親自到京  
倘有人盤問憑着胸中見識也支持得過

17a3 不足為慮只是單帶着男人隨去便有好多  
些不便

17a7 共是三人同走  
在學中動一紙游學呈詞批箇文書執照

17b2 帶在身邊路經省下

17b10 □(尋)下一所潔靜飯店 板木缺損

18a1 歇下行李…裝在碟內…斟着慢飲  
原來世間有這樣美貌女子…就想粧些  
風流家數兩下眉頭眼角弄出無限情景  
來了只因

18a8 且自去衙門前打幹正事到得去了半日  
傍晚回店剛坐得下隔壁聽見這里有人  
聲那女子又在窓(窓)邊來瞧看

18b1 小生偶窓(經)□(於)此與娘子非戚非  
親 板木缺損

18b9 不會見有舍人這等丰標必定是貴家出  
身及至問人說是

18b10 恐怕錯了對頭後來怨恨常對小娘子道  
敢是與舍人是夙世姻緣太(天)遭到此  
成就

19a9 寫在一幅桃花箋上

19b3 不過是謙讓的說話

20a6 纔回下處

20a8 花一般的娘子滾到身邊  
□□(要想)骨肉女伴中別尋一段姻緣  
以見我之情而今□(既)有此事不若權  
且應承定下此女 漏刻

23a2 相別當員外起身上路

23a4 問着了杜子中的寓所

23a6 忙差長班接到下處

23a8 小弟同寓多時

24a10 這寓所起先原是兩人同住的今去了魏  
撰之房舍儘有就安下了開俊卿主僕三  
人還綽綽有餘當下

24b6 而今同臥一室之中  
那里遮掩得許多

25a3 子中是箇聰明人有甚不省得覺道有些  
詫異愈加留心聞(偷)窺越看越發踈踈  
俊卿見說着心病

26a1 坐在一處笑道一向只恨兩雄不能相配  
今却天遂人願也俊卿急站起身來道

26a4 爭奈緣事已屬于撰之

26a7 況且撰之又不在此何反舍近而求遠

26a10 我有無疑

26b7 撰之聽得纔走出來在小弟手裡接去觀  
看此時偶然家中接小弟回去

27a2 何嘗是撰之拾取

27a4 既是曾見箭上之字可還記得否

27a6 小弟須是杜造不出

27b4-10 魏撰之題起所許之言就把這家的說合  
與他豈不兩全其美況且當時只說是姐  
姐他心裏豈(並)不會曉得是妾身自己  
也不是哄他了子中驚訝道原來小姐在  
途中又有這段奇事今若說合與撰之不  
惟見小姐在友誼上始終全美就是我與  
小姐配合與撰之也無嫌矣  
此間已是布置…無不停當…子中討差  
解餉到山東地方

29a9 騎馬傍着子中的官轎

29b2 小姐扯開弓喝聲道着那响馬不曾防備  
早中了一箭…小姐疾鞭坐馬趕上了轎  
子高聲道賊人已了當也

29b7 保候在外小姐進見備說京中事體及杜  
子中營為調去兵道之事

30a2 已將身子嫁與共他同歸的事說出

30a4 見說開舍人已回

15a6 圖成此親事不想…時值軍政考察在按院  
處開下款數遞了一個揭帖

15b2 兵道行牌到府來說是奉旨犯人  
府間准了訴詞不肯召保俊卿就央了同窓

15b5 新中的兩個舉人去見府尊府尊說

15b10 同心之友

16a1 而今我們匆匆進京去了心下如割

16b4 做定了圈套陷人

16b2 上下分派一分派使用得停當…做一件未  
結公案了

16b10 是你去  
倘有甚麼人盤問憑着胸中見識也支持得  
他過不足為慮只是須得個男人隨去這却  
不便

17a8 共是三人一起走  
在學中動了一個游學呈子批个文書執照

17b3 帶在身邊了路經省下

18a2 尋下了一所幽靜飯店

18a3 歇下了行李…放在碟內…斟着慢喫

18a10 原來世間有這樣標致的…就想粧出些風  
流家數兩下做起光景來怎當得

18b3 且自衙門前幹事去到得出去了半日傍晚  
轉來俊卿剛得坐下隔壁聽見這里有人聲  
那個女子又在窗邊來看了

19a1 小生在此經過的與娘子非親非戚

19a2 不會見有似舍人這等丰標的必定是貴  
家的出身及至問人來說是

19b2 恐怕做了對頭後來怨恨常對景小娘子道  
敢是舍人有些姻緣動了

19b5 寫在箋紙上

20a8 不過謙讓些說話

20b1 纔回得下處

21a2 老婆滾到身邊

21a4 要在骨肉女伴裏邊別尋一段姻緣發付他  
去而今既有此事我不若權且應承定下在  
這里

23a4 相別了起身上路

23a6 問着了杜子中一家

23a8 忙差長班來接到下處

24a2 小弟同寓了多時

24b2 蓋是子中先前與魏家同寓今魏家去了房  
舍儘有可以下得聞家主僕三人

24b7 而今弄在一間房內了  
那里粧飾得許多來

25a2 杜子中是聰明的人有甚省不得的事曉得  
有些詫異愈加留心聞窺越看越了

25a4 俊卿見說着心中病

26a2 坐在一處笑道一向只恨兩雄不能相配  
今却遂了人願也俊卿站了起來道

26a5 爭奈有件緣事已屬于撰之

26a8 況且撰之又不在此間現鐘不打反去鍊鋼  
我有無疑了

26b1 撰之聽得走出來在小弟手裡接去看此時  
偶然家中接小弟

27a1 何曾是撰之拾取得的

27a3 既是曾見箭上字來可記得否

27a5 小弟須是造不出

27b5-28a1 魏撰之問起所許之言就把這家的說合與  
他成了豈不為妙況且當時只說是姊姊他  
心裏並不會曉得是妾身自己也不是哄他  
了子中道這箇最妙足見小姐為朋友的美  
情有了這個出場就與小姐配合與撰之也  
無嫌了曉曉得途中有又這件奇事

28b1 此間辨白已透…無不停當了…子中討下  
差來解餉到山東地方

29a9 騎了馬傍着子中的官轎

29b3 小姐掣開弓喝聲道着那邊人不防備的早  
中了一箭…小姐疾鞭着坐馬趕上前轎高  
聲道賊人已了當了

29b8 保候在外了小姐進見備說了京中事體及  
杜子中營為調去了兵道之事

30a3 已將身子嫁他共他同歸的事也說了

30a6 見說開舍人回來了



12a8 一時着了忙卸著便走  
 12b7 隨從的虞候虎狼相似不甞(見)住身子  
 13b3 頃刻叫上來個做公的  
 14a6 一直押到開封府來  
 14b4 頓口無言只得招出實情  
 其時有一個宗王家眷在東廡下張設帷  
 幃擺下酒設觀看燈火那時金吾不禁人  
 15a2 海人山語言鼎沸喧天振地更有那花砲  
 流星你放我賽  
 15a6 那宗王有個女兒名喚真珠姬年方十七  
 15a7 娃子家心性喜的是頑耍他見恁般熱鬧  
 不免舒頭探腦向幃外張望常言慢藏誨  
 盜冶容誨淫却動了一夥劇賊的火  
 宗王家眷正在看得興濃處只見一個女  
 15a9 僧揆入幃來自夫人以下各各問訊了便  
 立在真珠姬身邊夫人正問那尼僧你是  
 那處尼僧  
 忽見眾人一齊發起喊(喊起)來却被放  
 15b2 花砲的失手燒了帷幃烟焰滿幃眾女眷  
 一時忙亂你撞我跌亂搶出幃來急得那  
 真珠姬沒走一頭處  
 那女僧叫道莫要慌隨我來一把扯著真  
 珠姬的手在人叢中揆至隙處見放著一  
 15b4 乘兜轎女僧連忙扶真珠姬入轎坐了女  
 僧便對轎夫說你轎若空閑快抬這小姐  
 到王府裏去多賞你酒錢我隨後跟來轎  
 夫應道當得當得扶轎上肩四足並舉其  
 行如飛  
 莫說真珠姬是幼年閨女就是男子漢到  
 15b9 如此倉卒也要著了道兒且放著真珠姬  
 上轎的事  
 再說王府家眷帷幃被燒驚得亂攔眾人  
 擁上來拽倒帷幃幸而火息不曾延燒別  
 家帷幃自宗王夫人以下及養娘丫鬟婢  
 16a1 女等輩簪珥釵釧都被人搶去盞撲粉碎  
 虞候幹辦家人也都失去帽擠落鞋一家  
 敗興聚集在一搭兒人都在只不見了  
 真珠姬  
 當時四下呼喚找尋並無影響那時宗王  
 16a6 聞報數(叫)夫人等眾快回王府連夜差  
 人出招出揭報信者賞錢三千貫收留者  
 五千貫滿城挨訪鬧了數日杳無音信不  
 題  
 且說真珠姬當夜在轎中深以為幸甚感  
 16a9 尼僧坐還未穩倏忽轉灣心頭小鹿不住的  
 撞思想夫人等眾不知如何光景只見  
 轎夫脚高脚低越走越黑舉眼看時却是  
 空闊所在喧鬧之聲漸遠真珠姬見不是  
 日裏來的舊路心裏正有些疑惑忽然住  
 了轎轎夫多走了去却不是自家府門  
 17a8 抬到後面  
 17a9 姦淫已畢各自散去  
 17b2 自覺□□□□(下體疼痛)雖在昏醉中  
 依稀也畧記得些事明知著了人手  
 18a3 □□(主翁)却見他美色甚是喜歡更問  
 他來歷  
 19a4 約莫走了五七里路至一荒野之中抬轎  
 的放下竹轎

12a8 一時着了忙想道利害卸著便走  
 12b7 隨從的虞候虎狼也似好不多人在那里不  
 甞住身子  
 13b4 又叫了十來個做公的來了  
 14a7 一直裡押到開封府來  
 14b5 對口無言只得招出實話來  
 15a4 其時有一个宗王家在東首  
 15a4 有个女兒名喚真珠因趙姓天潢之族人都  
 稱他真珠族姬年十七歲  
 宗王的夫人姨妹族中却在西首姨娘曉得  
 外甥真珠姬在幃中觀燈叫个丫鬚走來相  
 15a6 邀一會上覆道若肯來當差兜轎來迎真珠  
 姬聽罷不勝之喜便對母親道兒正要見見姨  
 娘恰好他來相請是必要去夫人亦欣然許允  
 打發了鬚先去回話專候轎來相迎  
 過不多時只見一乘兜轎打從西邊來到帷  
 15b1 前真珠姬孩子心性巴不得就到那邊頑耍  
 叫養娘們問得是來接的分付從人隨後來  
 自己不耐煩等待慌忙先自上轎去了  
 纔去得一會先來到的丫鬚又領了一乘兜  
 15b5 轎來到說道立等真珠姬相會快請上轎王  
 府裡家人道真珠姬方纔先隨轎去了如何  
 又來迎接丫鬚道只是我全這乘轎來那里  
 又有甚麼先到  
 15b8 家人們曉得有些蹊蹺了大家忙亂起來開  
 之宗王着人到西邊去看眼見得決不在那  
 里的了急急分付虞候祇從人等四下找尋  
 並無影響急具事狀告到開封府中曉得  
 是王府裡事不敢怠慢遣緝捕使臣挨查  
 踪跡王府裡自出賞揭報信者二千貫竟無  
 下落不題  
 16a4 且說真珠姬自上了轎後但見轎夫四足齊  
 舉其行如飛真珠姬心裡道是頃刻就到的  
 路何須得如此慌走却也道是轎夫脚步慣  
 了的不以為意及至抬眼看時候忽轉灣不  
 是正路漸漸走到狹巷裡來轎夫們脚高步  
 低越走越黑心裡正有些疑惑忽然轎住了  
 轎夫多走了去却不見有人相接  
 17a3 抬到後面去後面走將一个婆子出來扶去  
 放在牀上睡着  
 17a5 姦淫已畢分付婆子看好各自散去  
 17a8 自覺陰戶疼痛把手摸時周圍虛腫明知着  
 了人手  
 17b9 主翁成婚後雲雨之時心裡曉得不是處子  
 却見他美色甚是喜歡不以為意更不曾提  
 起問他來歷  
 19a1 慌忙走了五七里路一抬抬至荒野之中抬  
 轎的放下竹轎

		19b8 說道 用刑訊問那賊夥中有的被拷打昏了倒 把王府這件事先招出來那尼僧也是一 夥均分贓物設計放火起覺暗約兜轎假 扮轎夫之事一一招稱明白 20b4 差人緝捕賊尼牙婆即刻捕到大尹喝教 (叫)加力行杖 20b8 將來抱在膝上 21b3 二來觀看小兒因小兒是宮中所不會有的 21b6 來做見面錢多塞在他小袖子里袖子盛 滿擠不下了欽聖命一個老內人逐一替 他收好又叫引他到各(客)官朝見頑耍			19b5 說得話出來道 20b2 記得王府中的事也但來問問看果然即是 這夥人 20b4 喝交加力行杖 21a7 將來抱在膝上寶器心肝的不住的叫 21b1 二來觀看小兒蓋因小兒是宮中所不會有的 來做見面錢多塞在他小袖子里袖子裡盛 滿了着不得欽聖命一個老內人逐一替他 收好了又叫領了他到各官朝見頑耍
38	趙縣君	1a-7b 正在焦躁間忽見個青衣童子 8a4 宣教引到裏邊僻處小童將盒子遞上道 8a10 我縣君…疑心他送錯了 輸了許多錢不會博得他一個有些不樂 8b6 連我縣君也老大不過意偶然藏得此數 個柑子特將來送與官人見意 心中無限喜歡雙手捧著盒子走到臥房 9a3 內將柑子藏好取五錢一個賞封放在盒 裏又在衣篋中檢出兩疋蜀錦來…粗錦 二端聊表微意伏祈縣君笑留 明日又見小童捧著幾餅精緻小菜走過 9b2 來道…無以為報想官人在客邊恐店家 小菜不中喫手製蔬菜數餅 9b6 想必是他得用的 9b8 煖起酒來 10b8 拜一拜 11a6 我在廣裏來帶得些珠寶在此 難道我就捱住在宅裏不成小童笑道官 人休得取笑快隨我來宣教大喜過望取 出好些珠寶將一幅紅綾包了籠在袖裏 11b5 小童進去稟知 注戀不捨…甚是相愛…把他丟在腦後 12b6 …丁惜惜央兩個幫開的…請他到家走 走 13a3 唱個掛枝兒 13b2 借這個出火 13b8 用得力重一個失脚踏進裏床 14a1 吳宣教聽得惜惜聲音 14a3 丁惜惜再四盤問 14a4 到次日別去自此以後 14b1 亟將綵帛二端封好又買幾般… 14b6 更加齊整吳宣教足恭下拜 14b7 說道 15a5 抬一張桌兒 17a4 小童笑道 23b6 傾在裏頭大夫脫了外衣 今夜且與我把去廂裏弔著明日送臨安 府推問去 24b5 急去竈上撮哄些暖飯熱了酒拿來 24b9 且到丁惜惜家裏消遣惜惜接著宣教 28b9 你前日若早對我說說我敢也 29a7 看看盤費不勾等不得吏部改秩 29b6	14	由	8a4 正在嘆恨間忽見箇青衣童子 宣教引到僻處小童出盒道趙縣君…疑心 8b1 是錯了 折了本錢不會嘗得他一箇有些不快活縣 8b6 君老大不忍偶然藏得此數箇故將來送與 官人見意 9a3 連忙走到臥房內開了篋取出色綵二端來 …小小生活二疋伏祈笑留 明日口見小童拿了幾餅精緻小菜走過來 9a10 道…今見官人在客邊恐怕店家小菜不中 喫手製此數餅 9b4 想必在他身傍講得話做得事的 9b7 盪了酒來 10b7 拜見一拜見 11a5 我在廣裡來帶得許多珠寶在此 11b1 難道我就捱住在宅裡了不成小童笑道休 得胡說快隨我來宣教大喜過望 11b3 小童進去稟知了 注戀不捨了…甚是相愛的…把他丟在腦 12b4 後了…丁惜惜邀請了兩箇幫開的…叫他 到家裡走走 13a2 唱箇歌兒 13a10 借這個出火的 13b6 用得力重一箇失脚踏進裡床 13b9 吳宣口口等聽得惜惜聲音 14a1 丁惜惜再四問他 14a3 到了次日別了出門自此以後 14a9 亟將綵帛二端封好又到街上買了些… 14b5 更加齊整了吳宣教沒眼得看足恭下拜 14b6 口說道 15a4 抬了一張桌兒 17a3 小童笑道 23b5 傾在裡頭了大夫便脫了外衣 今夜且與我送去廂裡弔着明日臨安府推 24b4 問去 24b8 急去灶上撮哄些暖飯盪了熱酒拿來 且到丁惜惜家裡消遣一消遣惜惜接着宣 28b8 教 29a6 你前日若早對我說說我敢也 29b5 看看盤費不勾用力等不得吏部改秩